上ノ国町四十九里沢A遺跡

発掘報告書

1974

上ノ国町教育委員会

序

当上ノ国町は、北海道の南部に位置し、本州文化が早く移入された等の関係から、北海道文化発祥の地として史跡、遺跡が非常に多く、上ノ国遺跡、原歌遺跡をはじめてして、縄文早期から晩期に至る上代文化研究のうえで貴重な資料が残されています。

近年、道路改良等による埋蔵文化財包蔵地の破壊が問題となっておりますが、昨年の大安在B遺跡発掘調査に引続き、一般国道228号線大澗地区改良工事に伴い、四十九里沢A遺跡の緊急発掘を行なうことになりました。

幸いにも市立旭川郷土博物館松井館長の深いご理解と道教委文化課のお力添えにより其田良雄氏、三好文夫氏、村上修氏のご指導のもとに、北海道教育大学旭川分校史学科学生諸君のご協力が得られ、7月25日に着手されました。

近年にない連日の酷暑に悩まされ続けながらも一カ月間に及ぶ炎天下の作業を終了いたしまして、以来、その出土品の整理、復元作業が続けられ、漸く完了いたしまして、報告書を刊行する運びになりましたことは誠に喜びに堪えません。

この報告書刊行にあたり、市立旭川郷土博物館其田良雄氏、三好文夫氏を始めとし、ご協力いただいた諸兄に対し衷心より敬意と感謝を申しあげると共に、この報告書が北方文化研究の上に稗益することを信じまして広くご紹介申しあげる次第であります。

昭和49年3月

北海道檜山郡上ノ国町長
森　三樹郎

北海道檜山郡上ノ国町教育委員会教育長
青　柳　隆

例　　言

1. 本書は、国道228号線改良工事にあたり、その道路用地内に所在した上ノ国町四十九里沢A遺跡の調査を函館開発建設部より委託されて、上ノ国町教育委員会が行なった調査報告書である。
2. 本調査は、昭和48年7月25日から8月25日まで実施した。
3. 本調査では、調査員として
   其田良雄（市立旭川郷土博物館）、三好文夫（同）、村上　修（芦別高等学校）と、調査補助員として
   中館吉達（北海道教育大学旭川分校学生）、大山和夫（同）、長田哲也（同）、山海庄市（同）、広瀬利伯（同）、岩淵正之（同）
   が現地作業を担当し、ほかに地元上ノ国町民の協力を得た。
4. 遺物整理には、調査員および調査補助員のほか、
   石崎菜穂子（北海道教育大学旭川分校学生）、田中厚子（同）、林　雅美（同）、佐々木尊彦（同）、外山裕子（同）、川真田雅裕（旭川大学学生）、長谷部真理子（同）、門別寿子（同）、伊藤日早子（元市立旭川郷土博物館員）がたずさわった。
5. 本報告書の編集および執筆は其田良雄が担当した。その責を負うものである。
6. 挿図のうち石器については、兼重達男氏（旭川医科大学）によるものである。
7. 写真のうち土器については、河野本道氏（市立旭川郷土博土博物館）によるものである。
8. 石質の肉眼による鑑定は、井口休夫氏（北海道教育大学旭川分校）にお願いした。
9. 本調査による出土遺物の保管は、すべて上ノ町教育委員会においてなされる。
10. 本調査の経費は、函館開発建設部にて負担された。
11. 本調査の準備から報告書作成にいたる一連の過程で、河野本道氏、松崎水穂氏、兼重達男氏には、多くのご教示とご協力を得た。また函館開発建設部、北海道教育委員会、桧山教育局、上ノ国町教育委員会、市立旭川郷土博物館の方々には、いろいろな形でお世話になった。ここに感謝の意を表する次第である。

目　　次

序

Ⅰ　遺跡の位置および環境…… 7

Ⅱ　発掘調査の方法と層位…… 7

1．調査の方法…… 7

2．層　　位…… 8

Ⅲ　出土遺物……12

1．土　　器……12

2．石　　器……16

Ⅳ　総　　括……34

図　目　次

Fig. 1　遺跡位置図
Fig. 2　発掘区平面図
Fig. 3　層位図（1）
Fig. 4　層位図（2）
Fig. 5　土器実測図
Fig. 6　土器拓影（1）
Fig. 7　土器拓影（2）
Fig. 8　土器拓影（3）
Fig. 9　土器拓影（4）
Fig. 10　土器拓影（5）
Fig. 11　土器拓影（6）
Fig. 12　土器拓影（7）
Fig. 13　土器拓影（8）
Fig. 14　石器実測図（1）
Fig. 15　石器実測図（2）
Fig. 16　石器実測図（3）
Fig. 17　石器実測図（4）

図　版　目　次

PL. 1　遺跡遠景　東方天ノ川右岸より望む
PL. 2　遺跡遠景　南西方夷王山中腹より望む
PL. 3　遺跡風景　発掘前の状況
PL. 4　層位　2—C・D　ライン
PL. 5　発掘状況　23区～28区
PL. 6　土器出土状況
PL. 7　石器出土状況
PL. 8　発掘状況　F26区～F27区
PL. 9　土器出土状況およびピット分布状況
PL. 10　発掘調査終了後の道路敷設工事風景　昭和48年11月8日
PL. 11　土器（1）
PL. 12　土器（2）
PL. 13　土器（3）
PL. 14　土器（4）
PL. 15　土器（5）
PL. 16　土器（6）
PL. 17　土器（7）
PL. 18　土器（8）
PL. 19　土器（9）
PL. 20　土器（10）
PL. 21　土器（11）
PL. 22　土器（12）
PL. 23　土器（13）
PL. 24　土器（14）
PL. 25　土器（15）
PL. 26　土器（16）
PL. 27　土器（17）
PL. 28　土器（18）
PL. 29　石器（1）
PL. 30　石器（2）
PL. 31　石器（3）
PL. 32　石器（4）

表　目　次

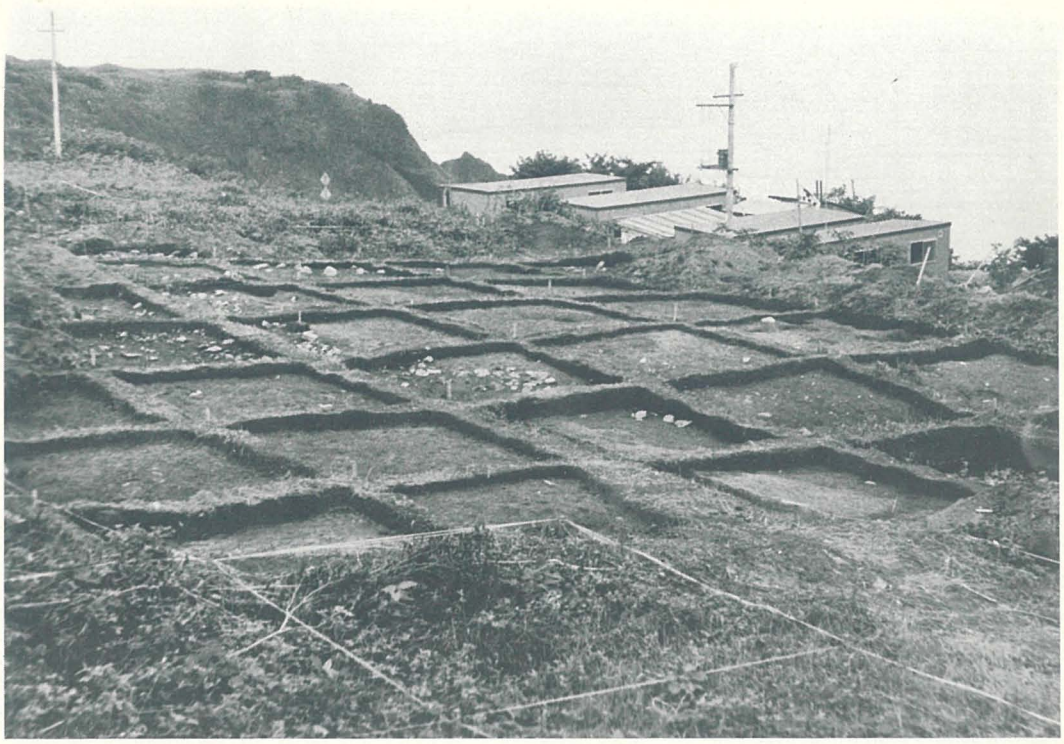
表1　石器一覧表……30

PL．1　遺跡遠景　東方天ノ川右岸より望む

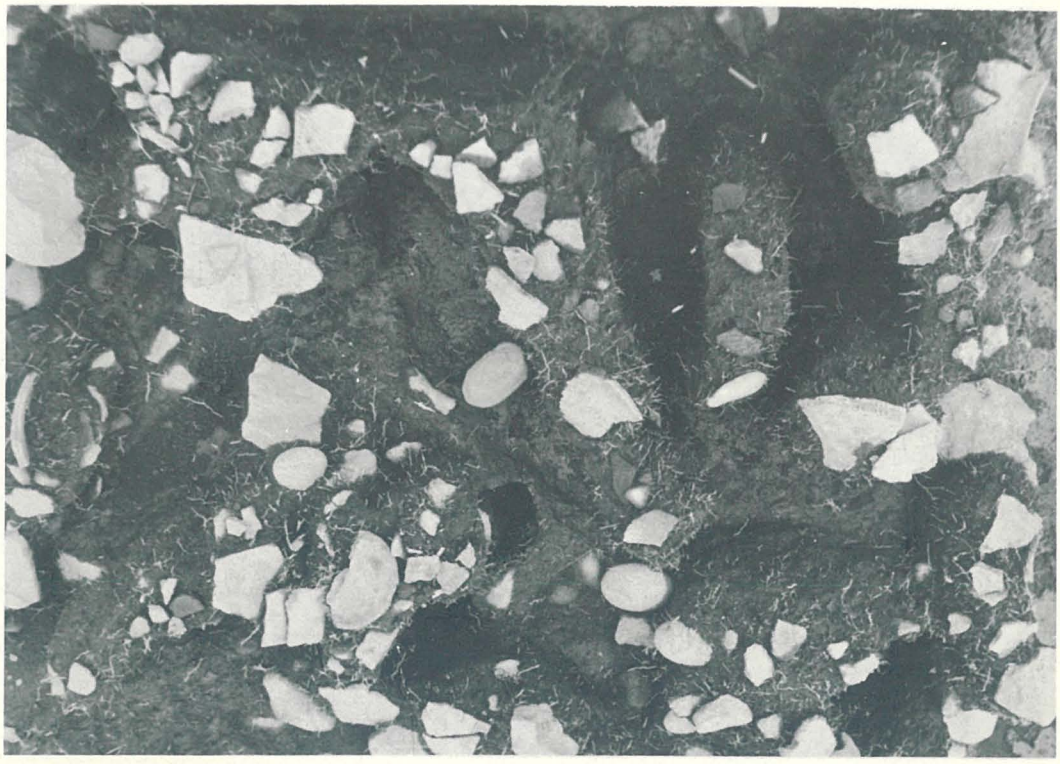
PL．2　遺跡遠景　南西方夷王山中腹より望む

PL．3　遺跡風景　発掘前の状況

PL．4　層位　2—C・D　ライン

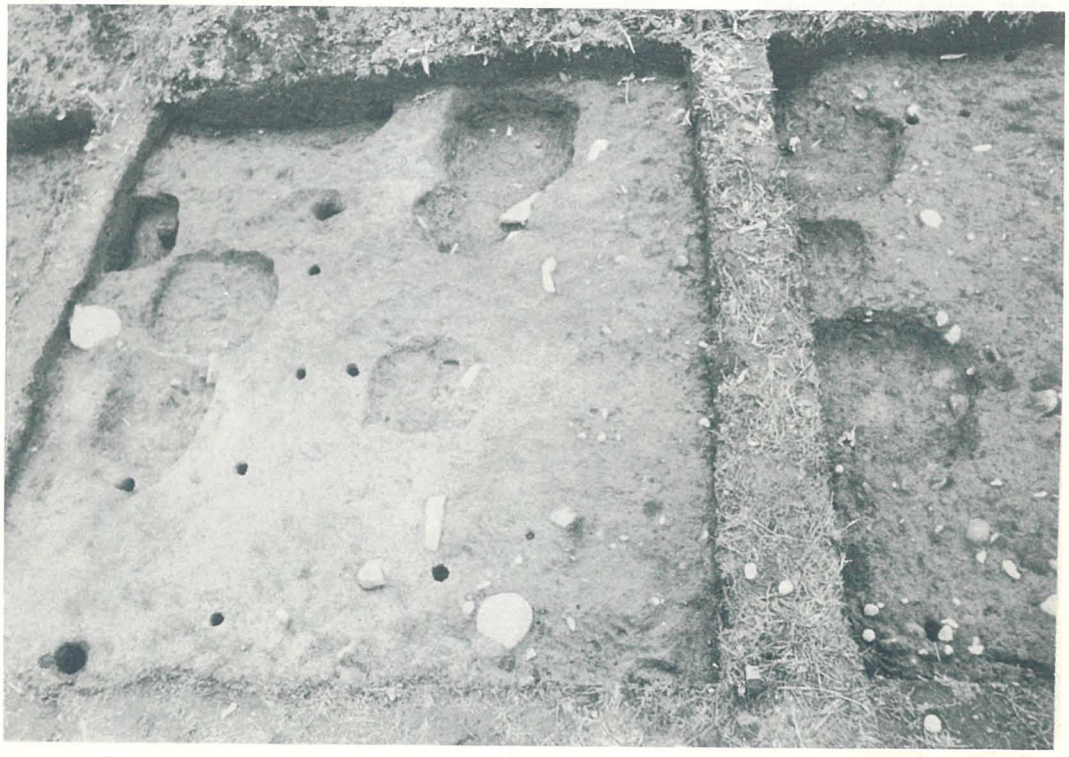


PL．5　発掘状況　23区～28区

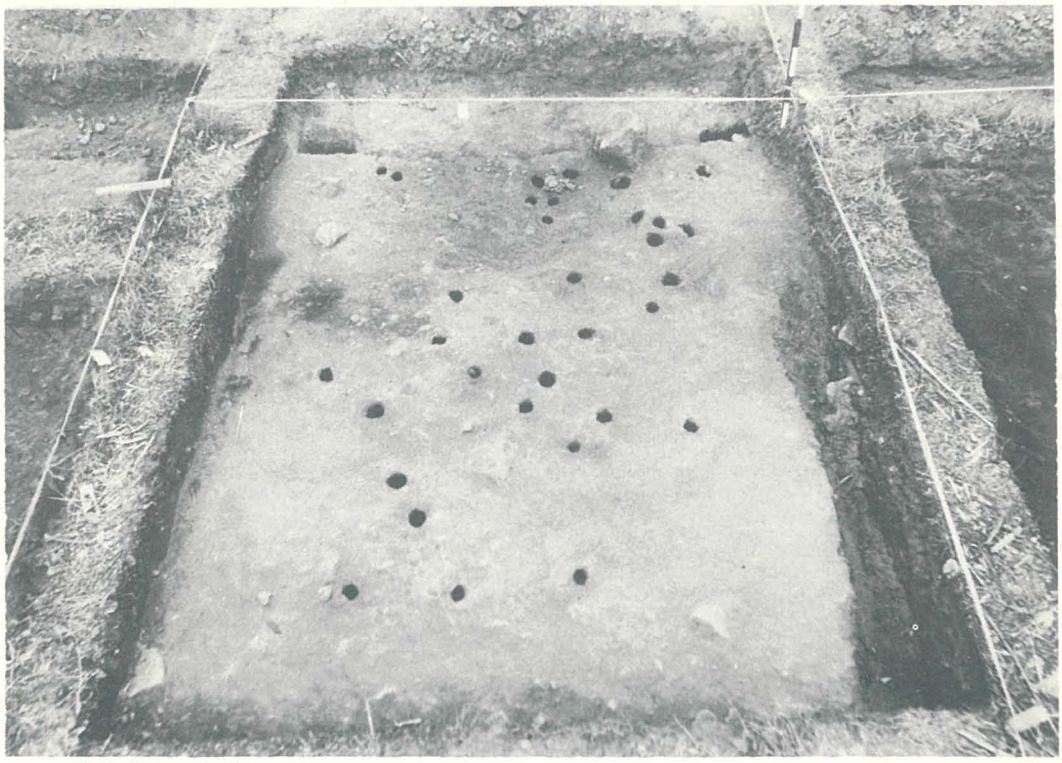


PL．6　土器出土状況

PL．7　石器出土状況



PL．8　発掘状況　F26区～F27区



PL．9　土器出土状況およびピット分布状況

PL．10　発掘調査終了後の道路敷設工事風景 昭和48年11月8日

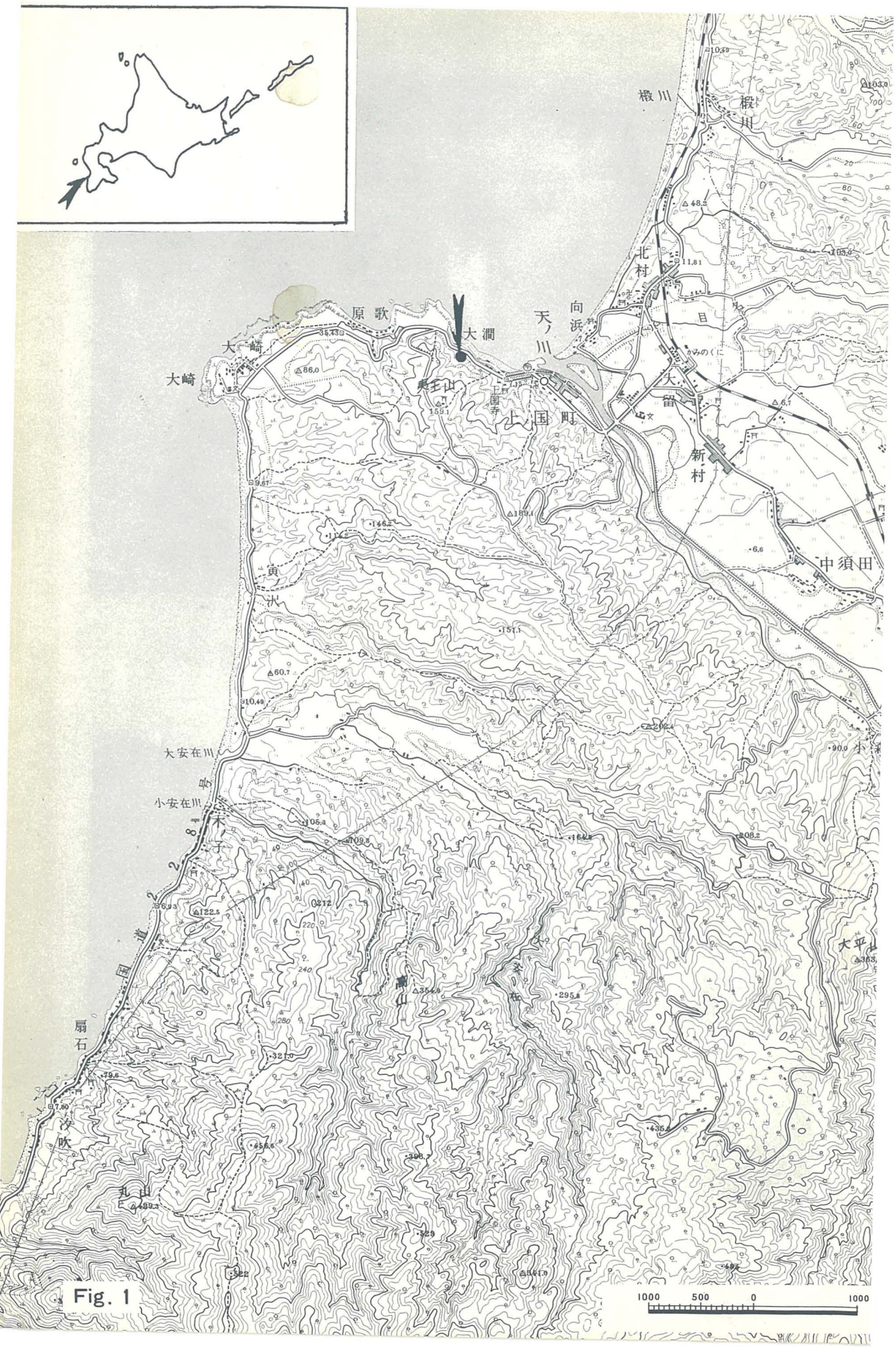

椴川
椴川
北村
向浜
天ノ川
大澗
原歌
大崎
大崎
奥玉山
上国寺
上国町
大留
新村
中須田
寅沢
大安在川
小安在川
木子
扇石
沙吹
丸山
蘭山
大平山
1000
500
0
1000

Fig. 1

Ⅰ　遺跡の位置および環境

北海道桧山郡上ノ国町四十九里沢Ａ遺跡は、国鉄上ノ国駅からおよそ2,200m西方の、国道228号線に沿いにある。

国鉄江差線に沿って流れ、下流で沖積平野を形成しながら日本海に注ぐ天ノ川の川口左岸には、上ノ国町市街部がある。天ノ川の左岸に沿って発達した丘陵は日本海へ張り出して、急崖をなして日本海面に落ちる。この付近の地形は概してこういった地形を呈し、わずかの海岸平担部を利用して、原歌、大崎など漁業を主体とした小集落が点在する。丘陵の西端部には、ちょうど上ノ国町市街の西側にそびえる標高159.1ｍの夷王山があり、その山麓もゆるやかな段丘を形成している。夷王山に源をもち、この段丘を剝って日本海へ注ぐ四十九里沢の水は、現在でも町民の水道用水として利用されている。段丘の海岸沿いに通る国道228号線の南側、およびこの四十九里沢の東側にあたる、標高約33m～36mのゆるやかな傾斜地が遺跡部分で、約25m×120mの範囲である。

この地域は、昭和初期まではニシン乾燥場として、またそれ以後つい最近までは馬鈴薯やトウモロコシなど、畑作地として利用されてきた。遺跡のほぼ中央部に形成されている溝は、畑作時の排水溝である。

遺跡の南西部、標高約35mラインに沿って、かっての道路跡が残っており、この道路は、遺跡の北側を通る現国道228号線が敷設されたことによって廃止になったものである。

現国道228号線が敷設されたのは昭和35年頃のことで、この工事によって遺跡付近の地形は大きく変えられることになった。発掘調査時においては、海岸線に近い傾斜のゆるやかな地域ほど遺物の出土頻度が高かったし、付近住民の話によれば、「かっては、遺跡が崖面までゆるやかに続いていて、わずかに海岸部へ突出したところには『オッキヤマ』（大きい山の意）と呼ばれる小高い山があって、その付近から土器や石器がかなり採集されたし、崖の下の砂浜からも採取された」という。砂浜のものは崖面の土砂くずれによるものであろう。遺跡がかって崖面まで拡がっていたとすれば、図面上からみて、現在の遺跡と同じくらいの面積の、しかも主要な部分が、現国道228号線敷設の際に、すべて破壊されてしまったものと推察される。

なお、『オッキヤマ』と呼ばれていた部分には、このたびの発掘調査終了をまって、遺跡部分に道路を敷設する建設業者の事務所が建てられている。

Ⅱ　発掘調査の方法と層位

1　調査の方法

このたびの発掘調査は、国道228号線改良工事に伴う緊急発掘で、発掘地域が道路予定地であるため、北西―南東に長い範囲である。

発掘区の設定は、遺跡のほぼ西端を基点にして、ほぼ北東方向４ｍごとにＡ区、Ｂ区、Ｃ区……とし、それに直交して南東方向４ｍごとに１区、２区、３区……とした。それぞれ４ｍ×４ｍのグ

リットは、名称を交点の記号で表わし、A1区、B2区、C3区……のように呼ぶことにした。また各区の境界ラインについては、A区とB区の境界をA・B、1区と2区の境界を1・2とし、2—A・Bは2区のA区とB区の境界ラインを表わす記号とした。

遺跡の状況を把握するために、最初にD区のC・Dライン沿って1m×120m、5区の5・6ラインに沿って1m×20mの、それぞれ試掘溝を設定した。このことによって、遺跡の主要部分は1区～10区と23区～28区のC区～F区であることが予想された。

発掘作業は1区から順に着手することにした。

A1区～A9区はかっての道路跡であったため、また17区、18区、20区～22区は耕作時の排水溝によって完全に破壊を受けているため、発掘区から除外した。

最終的な発掘総面積は1,879.62㎡である。

2 層　　位

遺跡は、ゆるやかな斜面を形成する台地上に立地しているため、たえず土砂の流失と推積が行なわれていたものと思われる。また耕作などの人為的な破壊も大きい。したがって遺物包含層は比較的薄く、あまり良好なコンディションとはいえない。

層位については、各グリットごとの境界ラインで、そのほとんどを記録したので、Fig. 3およびFig. 4 に示す。つぎにそれらの各層位について説明を記すことにする。

第Ⅰ層：いわゆる表土層で、人為的に攪乱を受けている層である。最近まで、馬鈴薯やトウモロコシを栽培していたために、深さ約20m～30mにわたって、耕作による攪乱を受けている。所によっては表土下直接基盤面に達するし、遺物包含層である第Ⅱ層が概して薄くとぎれていること、また第Ⅱ層と共通の遺物を包含していることを考え合せると、第Ⅱ層および基盤面のかなりの部分を剝って形成したものであろう。

遺跡全域にわたって、直径約5㎝～10㎝ほどの円形ピットが、かなり濃密に分布している。例外なく先端が鋭利な角度をもち、表土層から基盤面に達するものが多い。これは昭和初期まで建てられていたニシン乾燥場の柱穴である。また、所々に直径1m前後の円形ピットが基盤面を掘り込んだ形で確認されている。これも最近のもので馬鈴薯貯蔵用に作ったもの、ないしは肥溜であった。これらのピット内の土も第Ⅰ層に含まれる。

第Ⅱ層は遺物包含層で、第Ⅱa層、第Ⅱb層、第Ⅱc層に分けられる。

第Ⅱa層：四十九里沢に面する斜面上部に、部分的にみられるもので、少なくともⅡb層よりも後に流れ込んで推積した層である。黒色を呈し、有機質に富み、礫を多く含む。第G類土器は、主にこの層から濃密に出土している。

第Ⅱb層：第Ⅱa層とほぼ同じ位置に分布し、それよりも先に推積した層である。礫を多く含み、黒褐色を呈する。

第Ⅱc層：基盤直上にある遺物包含層で、暗褐色を呈する。遺物の出土状況からみて、この層は、流失した土砂が再推積したものと考えられる。また、この層の分布が途切れ途切れになって薄

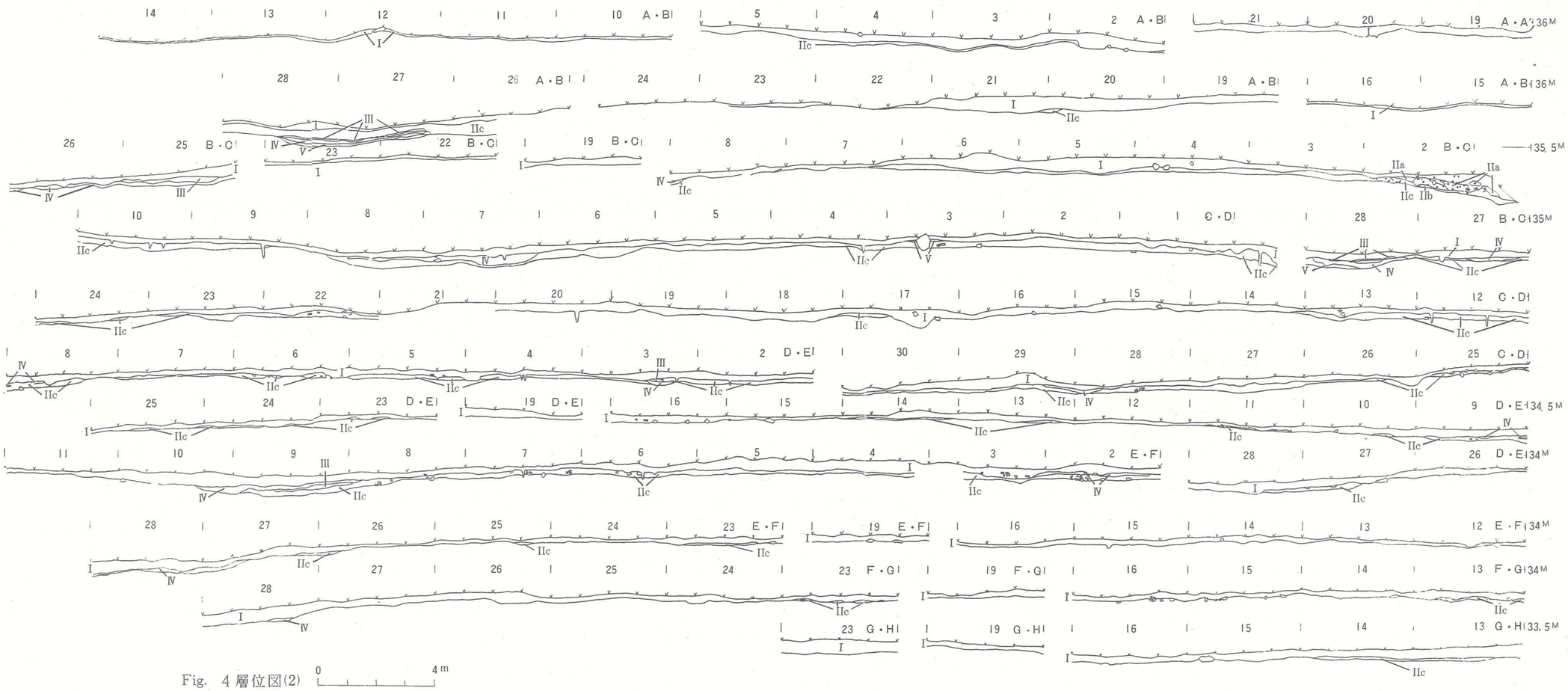


Fig. 4 層位図(2)

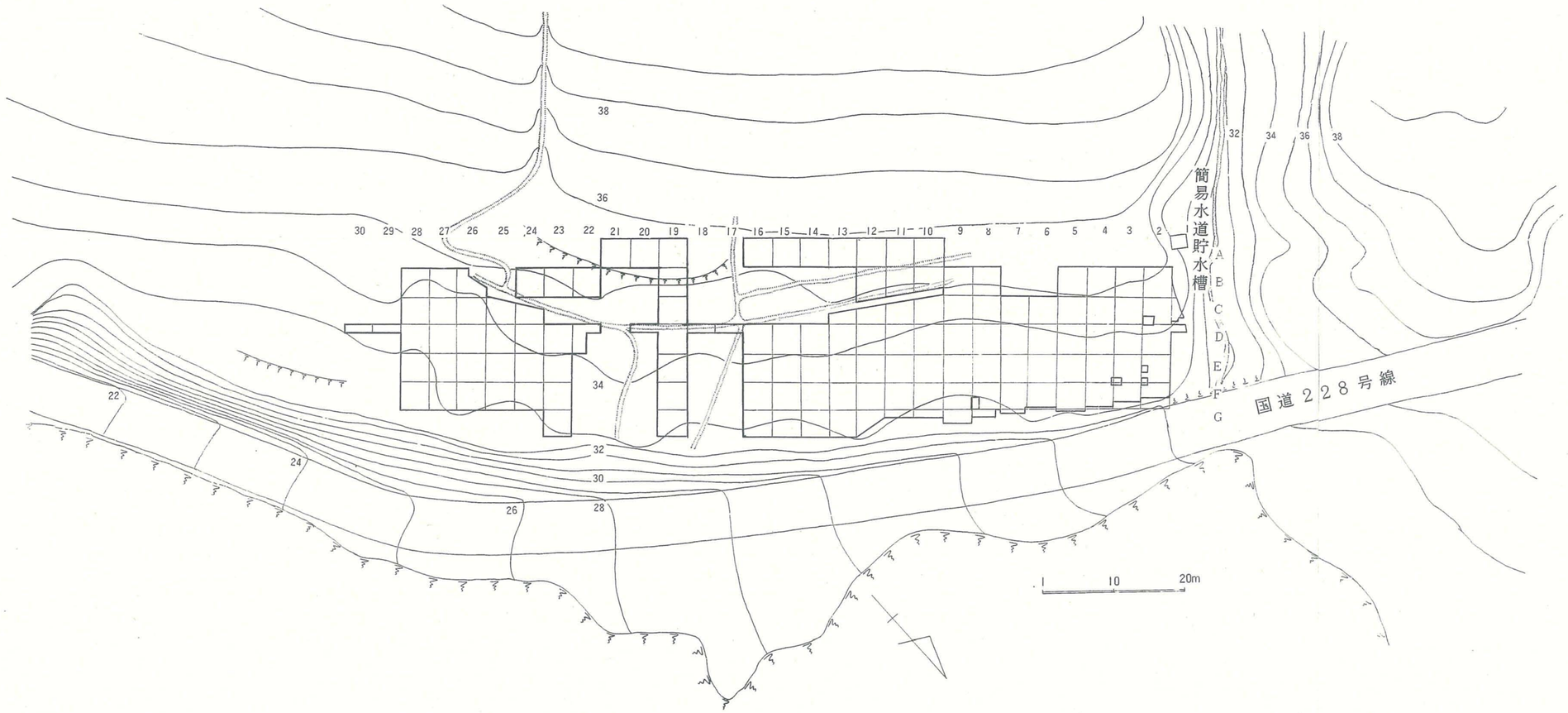


Fig. 2 発掘区平面図

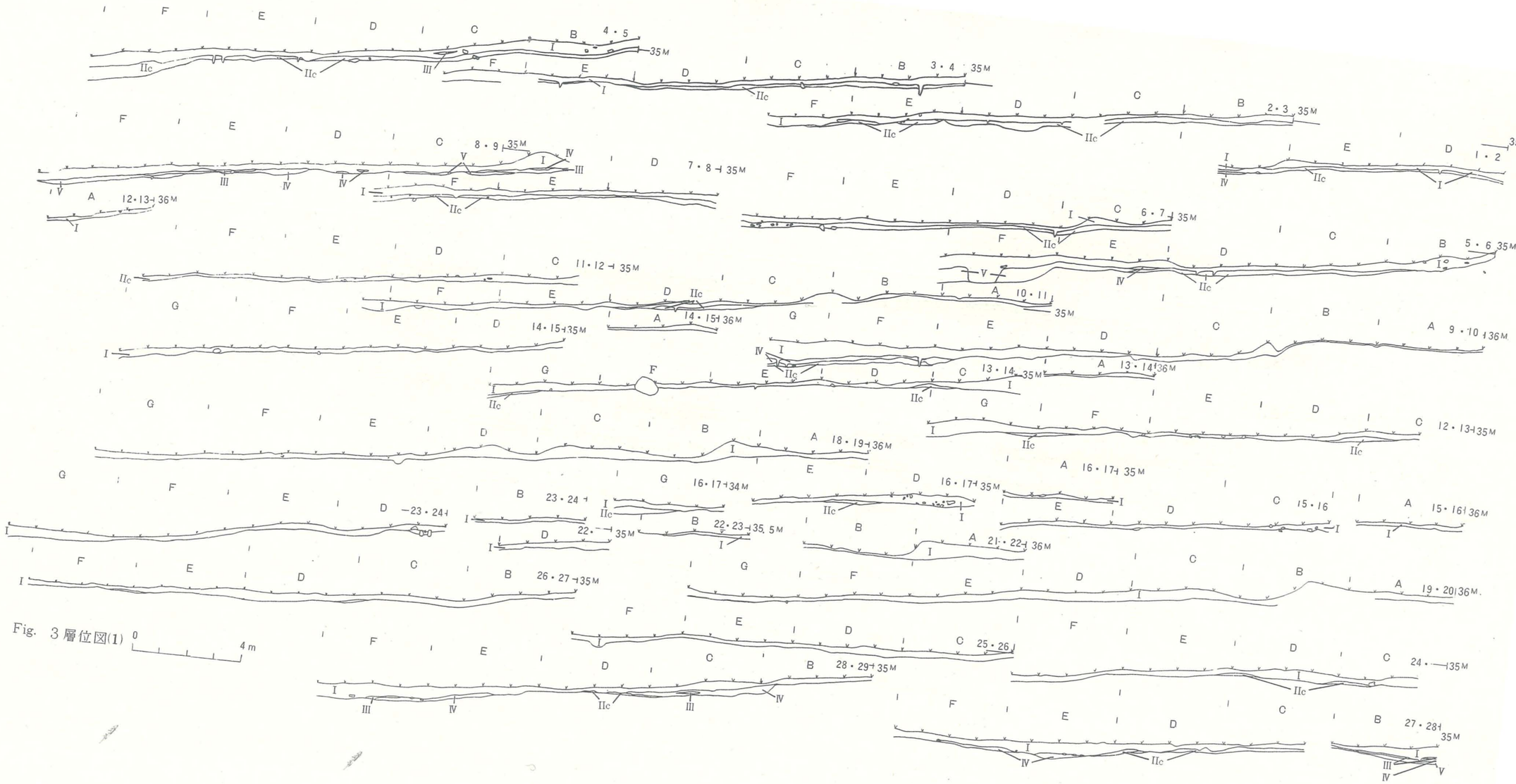

4・5 35M
3・4 35M
2・3 35M
8・9 35M
7・8 35M
1・2
12・13 36M
6・7 35M
5・6 35M
11・12 35M
10・11 35M
14・15 35M
14・15 36M
9・10 36M
13・14 35M
13・14 36M
18・19 36M
12・13 35M
16・17 35M
16・17 34M
16・17 35M
23・24
15・16
15・16 36M
22・23 35.5M
21・22 36M
26・27 35M
19・20 36M
25・26
28・29 35M
24・ 35M
27・28 35M
0
4m

Fig. 3 層位図(1)

いことから、上部の大半は耕作時に剝られてしまったものであろう。11区～28区においては、ほとんど部分的にしかみられない。

以上のように第Ⅱ層を3層に細分したが、第Ⅱa層、第Ⅱb層は流失した土砂の再推積する規模が比較的大きなブロックによるということで、第Ⅱc層の意味するものとは変らない。あるいは一括して取り扱ってもよいものと思う。

第Ⅲ層：かって、8区～10区および26区～23区の2個所に、浅い沢が形成されていたものと思われる。この地域には厚さ5㎝前後で、灰褐色を呈した層が部分的な広がりをみせている。これは火山灰が流水によって二次推積したものであろう。遺物の包含はない。

第Ⅳ層：きわめて有機質に富む黒色土層である。分布は第Ⅲ層とほぼ同じで、その直上ないしは直下に位置する。また希には他の部分でわずかにみられる。やはり流水によって推積したもので、遺物の包含はない。

第Ⅴ層：第Ⅲ層ないしは第Ⅳ層の直下に稀にみられる暗褐色土層で、砂質である。流水の営力によるもので、比重の大きいものが、第Ⅲ層や第Ⅳ層の下に、同時に推積したものであろう。遺物包含はない。

Ⅲ　出土遺物

遺構らしきものは、すべて道路跡、排水溝、ニシン漁場柱穴、馬鈴薯の貯蔵穴および肥溜など、最近のものであることが確認された。これらについては層位の項で説明しているので省略する。

1　土　　器

第Ⅰ層および第Ⅱ層から出土した土器片は総数5,805点を数えた。そのうち、ほぼ器形を知ることができるまで復元できたのは10個体であった。土器片の大多数は小片で、10㎝を越えるものは、わずか数十片にすぎない。したがって器形についてはほとんど知ることができない。しかも磨滅がひどく、文様の不鮮明なものもかなりある。

こういった状況で、土器をすべて分類することは不可能であった。本報告書で取り扱った土器は、文様を中心に、比較的特色をよく示すもののうち主なものである。

以下それらを9類に大別して、各々について述べることにする。

A類土器（Fig.6—1、PL.21—1）

いわゆる貝殻文を有する土器で、出土例は1例しかない。胎土に砂粒を含み、焼成は比較的良好である。厚さ約7㎜で、表面は茶褐色を呈し、横位の浅い沈線が平行に数条施こされ、更に同一施文具によって縦位に施文されている。磨滅した小片のためはっきりしたことはわからないが、縦位

のもののうち、少なくとも4条は同時に途切れていることから、貝殻のような、または櫛状の施文具を用いていることはまちがいない。裏面は黒褐色を呈し、表面のものよりは細い横位の貝殻条痕文が施こされている。

B類土器（Fig.6—2～28、PL.21—2～28）

撚糸文、組紐圧痕文を有するグループである。ごく少数の例を除き、くすんだ茶褐色を呈する。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良好といいえない。全般的に磨滅が著しい。厚さは約5㎜～8㎜と比較的薄手に作られている。小片ばかりではっきりしたことはいえないが、24に極端な例をみることができるように、概して胴部付近でゆるやかなカーブを示すらしい。

撚糸文のものには、微隆起帯を伴うもの、2本単位の撚糸文を斜行ないしは羽状に施こしたもの、点列する刺突文を伴うもの、水平に数条施こすものなどがある。

2は微隆起帯を伴うものの口縁部破片である。胎土に砂粒を含み、焼成も悪く、黒褐色を呈する。厚さは5㎜とかなり薄く成形されている。口縁部はわずかな外反を示し、水平に数条の微隆起帯を形成している。微隆起帯の間には1条の撚糸文を施し、更に3段目の撚糸文に沿って、かすかに点列文を付している。2本単位の撚糸文はすべて斜行ないしは羽状を呈しているが、あるいは斜行するものは羽状のものの一部分かも知れない（3、4、8～15、20、21）。中には反対方向に撚ったものとの組み合せで「ハ」の字状を呈するものもある（8～10、20）。点列する刺突文には、単純な刺突具によるもの（11、12、15）のほか、二又状施文具によるもの（13）などがあり、ほかに撚り返した縄の先端によるもの（16、17）などもある。水平に数条施こしたものの例は16、18、19、22～25で、18、19はその下に短い縄圧痕文を連続して施す例である。26～28は縄圧痕文を有するもので、27には縄文風の文様を施文している。28は他のものよりも厚く、焼成も堅く、赤みをおびた褐色を呈している。あるいは別なグループに属するものかも知れない。

C類土器（Fig.7—29、PL.22—7）

ごくわずかに出土しているうちの1片である。厚さは9㎜で比較的厚く、胎土には粗粒の砂礫を多く含むほか、一部分に繊維混入の痕跡がみとめられる。表面の色調は茶褐色を呈し、焼成はあまり良好とはいえない。胴部破片と思われる。文様は、磨滅がひどくはっきりとはわからないが、縦方向に一見撚糸文風のものを施こし、更に縦方向に3条の太い沈線を施こしている。

D類土器（Fig.7—35～38、PL.22—35～38）

35～37は口縁部破片で、38は頸部破片である。これらをみると、口縁部がやや外反し、胴部はわずかにふくらみをもつ器形らしい。胎土には繊維を含まず、砂粒を多く含む。焼成は比較的良好で、茶褐色を呈する。

口縁部以下には地文がなく、数条の隆起帯がめぐらされ、更に間に縦位の隆起帯が垂下する。隆起帯に縄圧痕文を施こし、更に無文部にも数条の縄圧痕文を施文する。この文様帯の下部には左傾する複節斜行縄文を施こしている。

E類土器（Fig.7—30～34、PL.22—30～34）

図中のものはすべて同一個体である。胎土に多量の微砂粒を含み、比較的堅く焼成されており、暗褐色を呈している。口縁部（30、31）をみると、急激に肥厚した口唇部の上に太く深い沈線を1条めぐらしている。その沈線の内側口唇部が更に高くなっているところをみると、口縁部はかなり変化するらしい。32～34は胴部破片で、右に傾斜をもつ荒い複節斜行縄文を施した後に、更に3本を単位とする櫛状施文具で横位に、あるいは円弧状に沈線を施こす。器形は口縁部に変化をもった、外反する深鉢型を呈するらしい。

F類土器（Fig.5—5、Fig.8—39～55、Fig.9—57～73、Fig.10—75～79、PL.15、PL.23—39～55、PL.24—57～73、PL.25—75～79）

概して胎土に砂粒を多く含み、黒褐色ないしは茶褐色を呈し、稀には橙をおびた褐色を呈する。

Fig.5—5、PL.15は約口径141㎜、高さ187　で、頸部縮約のよわい壺型土器でこのグループではほぼ器形を知ることのできた唯一のものである。口縁部はわずかしかなく、器面全体が磨滅しているためはっきりわからないが、口唇部および胴部から上に左傾する単節斜行縄文を施こし、更に沈線によって入組文風に画かれている。磨消手法を用いていない。

ほかは小片ばかりのため器形についてくわしいことは不明だが、39、40をみると口縁部が外反し、胴部が張り出した壺形があるらしい。また42、44、51、57、67、70、73などの口縁部破片をみると、波状に形成されているもののあることがうかがえる。

文様は沈線文を有するもの、磨消手法を用いているものを含めた縄文を施こしたもの、および粘土紐を貼付けたものなどが見られる。沈線文を有するものには、39、40のように直線ないしは曲線状に数条施した外側に、更に太い沈線で囲んだもの、入組文風に施したもの（42、45、54）、平行沈線の間を更に（　）状に区切ったもの（49）、「　　」状のものを連続させるもの（71、76）などがある。

縄文を施したものには48、57、58、78のように口縁部に無文帯と併せてもつもの、59、60のように一見渦巻状に沈線で区画し、その間の一部を磨消したもの、単に沈線で区画したもの(61、63)、および粘土紐の上に施文するもの（74、77）などがある。

粘土紐を貼付けたものには67、70のうに波状口縁突起部から垂下するもの、口唇部を中心に粘土紐が表袋に連続して貼付けられるもの（69、72、73）などがある。

104の底部はスノコ状の圧痕文を有するもので、胎土および焼成をみるとF類ないしはG類に近い様相を呈している。さしあたってF類に入れておくことにしたい。

なお、58は右傾する斜行縄文を地文として、数条の沈線文を横走させたほか、短い沈線文が連続する。焼成においても多少異質さを示し、あるいはこのグループから除外すべきものかも知れない。

G類土器（Fig.5—1～4、6、7、Fig.9—56、Fig.10—80～87、PL.11～14、PL.16～18、PL.25—80～87）

このグループに属するものには、器形を知ることのできたものがいくつかあるので、まず、それらについて個々に述べることにする。

Fig. 5—1、PL.11は口径187㎜、高さ123㎜の深鉢型土器で、大きく外反し5個の山形をもつ花弁状の口縁部をもつ。ややふくらみをもつ胴部から下は、少し内弯しながら底部にいたる。文様は口縁部になく、頸部には平行する2本の沈線の間に点列した刺突文が施こされる。胴部以下には左傾する単節斜行縄文を施こし、回転角度が変わって一見縦位の羽状縄文を示す部分もみられる。

Fig. 5—2、PL.12は胴部から上の部分が復元された。口径は289㎜。前記のものとほぼ同じような器形を呈するものであろう。ただし、山形は4個の花弁形である。山形の頂部は少し肥厚し、裏面は内反する。文様は口縁部に沿って点列する楔形の刺突文と平行する沈線を、それぞれ2条づつ交互に施こしているほか、頸部に2本の平行沈線とその間に点列する刺突文を施こしている。胴部は直角に交わる沈線によつて区画され、その一部を磨消する。口縁部の無文帯部は黒褐色を呈し、よく研磨されている。

Fig. 5—3、PL.13は前二者とほぼ同じ器形を呈すると思われるが、胴部のカーブがやや丸みをおびている。また口縁部には9個のゆるやかな山形を形成する。口縁部には左傾する単節斜行縄文を施こし、更にその部分に8本の弧状の沈線を山形の間を1区画として横に連続させる。この文様帯の下には沈線によつて区画された無文帯があり、その下の胴部には波状の沈線および入組文風に沈線で区画する。胴部の縄文は文様体に沿って原体を回転させたものと思われる。口径は214㎜。

Fig. 5—4、PL.14は口径77㎜、高さ59㎜の小型鉢型土器である。黒色を呈し、焼成もあまり良好でない。文様は施こされていない。

Fig. 5—6、PL.16は口径429㎜、高さ約330㎜の出土品中最大の粗製鉢型土器である。口縁部に、指頭によると思われる突起を2個1組のもの3組と、更にそれらの間をわずかな山形に形成している。口縁部から下は、わずかなふくらみをもつて底部にいたる。文様は右傾する単節斜行縄文を器面全体に施こしている。

Fig. 5—7、PL.17は口縁部がかすかに内反し、胴部に若干の丸みをもち、底部の小さい粗製深鉢型土器である。文様は底部付近を除くほぼ全体に、左傾する斜行縄文を施すほかに、口縁部に沿って内側から外側へ円形のもので突いた突瘤文が連続して横環する。口径約340㎜、高さ約330㎜。

Fig. 5—8、PL.18は口縁部からほぼ直状に底部にいたる粗製深鉢型土器である。文様は器面全体に、右傾する単節斜行縄文を施こしている。口径約360㎜、高さ約295㎜。

以上のほか、同類の土器片としては、80～87がある。80は口縁部を篦様施文具で3個所押刻し、胴部から上に特異な様相をもつ右傾する単節斜行縄文を施こし、その下部には縦位の擦痕状のものをもつ土器である。たぶん深鉢型であろう。81、84も同種の粗製土器と思われる。82、86、87は口縁部ないしは頸部の破片で、刻目を1条ないしは2条施こしたものである。83は竹管による円形刺突文が沈線に沿って施文されるもので、わずか曲線の沈線もみうけられる。

なお、このほかに特殊なものとして85がある。一見小型の土器にみえるが、底部にあたる部分が張り出して、剝脱した痕のあるところをみると、特殊な土器の一部分であろう。孔が貫通していな

いところをみると、注口でもなさそうである。文様は口縁部と基部に刻目がめぐらされており、他は無文である。

H類土器（Fig. 5—9、Fig.11—88～103、PL.19、PL.26—88～103）

Fig. 5—9、PL.19は、ほぼ完全に復元できた唯一のものである。ほかは小片が多くて全貌を知ることができない。完形のものをみると、口径143㎜、高さ100㎜で、口唇は丸みをもち、ほぼ水直に立ちあがる口縁部の下からゆるやかなカーブをもって底部にいたる小型鉢型土器である。器面の磨滅がひどく、また剝脱した部分もあるが、口縁部に文様帯があり、その下には左傾する単節斜行縄文が施こされている。口縁部文様帯をみると、太く浅い沈線を2条横走させ、更にその下の頸部には肥厚帯を1条形成し、その上に等間隔に小さな貼瘤状のものを1個ないしは2個セットで連続させる。貼瘤の間は沈線様に形成している。88、89は同一個体の口縁部破片で、鉢型土器と思われる。口縁部に2個を一組るする小山形突起を有し、その下に3条の沈線が水平に施こされる。地文は左傾する単節斜行縄文である。90～103は復元されたものとほぼ同様な文様である。中には口縁部文様帯に地文として縄文を施こしたものもある。なお、93には部分的に赤色塗装の痕跡がみられるし、103には数条の平行沈線文のほかに三角形の文様もみられる。

I類石器（Fig. 5—10、Fig.12—105～118、Fig. 13—119～127、PL. 20、PL. 27—105～118、PL.28—119～127）

いわゆる土師器、須恵器、擦文土器と呼ばれるものを一括してとりあつかった。Fig. 5—10、PL.20は口径128㎜、高さ48㎜の完形品である。かなり薄く形成され、胴部下半にやや凹状の溝が数条あり、底部には糸切りの痕跡を残している。106、112、113、115、116は口縁部でわずかな立ちあがりをみせ、浅い数条の沈線をもつものであって、先の完形品に近い浅鉢型土器と思われる。107、108は大型の深鉢型土器の口縁部破片である。大きく外反し、口唇部はわずかに肥厚し、その上に1条の浅い沈線がある。105、110、111、114、117、118は同様に口唇部が平坦に形成されている。119、120は須恵器の破片である。頸部が立ちあがり、そのつけ根に隆起帯が一条施こされているほか、回転台の使用を示す擦痕しかない。121～127はいわゆる擦文土器の破片である。121～125は胴部破片で、擦痕文を有するほか、124は直線的な刻線文を施こしたものである。126、127は底部破片で、126は底部に刻線による三角形の文様を施こしてあり、127は中央に2㎜の孔を穿ったもので、焼成後に形成したものであろう。

2 石　　器

石器は、剝片を含めて総計924点出土した。そのうち、本報告書で取り扱つたものは完成品破損品および剝片に使用の痕跡を残すもののうち100点である。出土状況はE区、F区に多く、これは土器の場合と同じ傾向である。また第1層からの出土例は60％以上におよぶ。種類は、石鏃、石槍、石匙、ナイフ状石器、石篦状石器、石斧、磨石、刃器などである。

石鏃（Fig.14—1～19、Fig.15—51、52、PL.29—1～9、PL.30—51、52）

有柄のものと無柄のものに分けられる。有柄のものには基部を深くくり込んで、二等辺三角形に柄をつけたような形のもの（1～4）および、くり込みが少なくて菱形を呈するもの（5～10）がある。1、9は巾細に作られている。無柄のものには基部が直線状を呈するもの（11～14）と、浅いくり込みを形成しているもの（15～17）がある。直線状のものは両側縁がゆるやかな弧状を示し、基部で細まる。くり込みのあるものには両側縁が直線状になりあたかも二等辺三角形のような形を呈するものと、17のように側縁が弧状を呈し、ハート形を呈するものがある。18、19は基部を欠いている。51、52も先端部を欠くものである。基部は丸みをもち、不規則な側縁をもつもので、あるいは特殊な用途をもっているのかも知れない。

石槍（Fig.14—20～28、Fig.15—53～56、60、PL.29—20～28、PL.30—53～56、60）

比較的大きく、細身ないしは楕円形で、先端部を鋭く作りあげているものをいう。中には他の種類の石器の破損部で鋭利なものを含んでいるかもしれないし、23のような細身で半分を細身かげんに形成しているものはナイフのような用途かも知れない。後述するナイフ形石器とのちがいは両面加工か片面加工かという程度である。20～22、26、27は破損品の先端部である。23～25、28は両面加工の細身のもので、一端ないしは両端が鋭い角度に作出土されている。53～56、60は比較的小さく、全縁に荒い調整剥離を加えて楕円形に作りあげている。

石匙（Fig.14—29～39、Fig.15—40～47、64、65、Fig.16—68、71、PL.29—29～39、PL.30—40～47、64、65、PL.31—68、71）

全体的にみて、出土例はかなり多い方である。種類は大まかに縦形、横形、斜刃形の3つに分けられる。この中で、縦形のものが圧倒的多数をしめている。これらに共通した特色は主要剥離面を残してること、およびほとんどが打撃点側につまみを作出ししていることである。29～39、40～46　64、65、68、71は縦形のものである。例外なく側縁に刃部を形成し、中には先端部を丸形に形成したもの（31～33、39、65、68）、ほぼ直線状に斜めに形成したもの（34～37、41、64）などがある。38、42～46は先端部欠損したものである。横形のものは47の1例だけである。つまみを形成するくり込みも少なく、刃部は一部分にしかなく、未完成品と思える。斜刃形のものも29の1例だけである。ほぼ三角形を呈し、全縁に調整加工を施こし、つまみは角の一端についている。

ナイフ状石器（Fig.15—61～63、Fig.16—70、PL.30—61～63、PL.31—70）

縦形の石匙からつまみをとつた形のものである。打撃面の残っていることから石匙の破損したものではなく、予めこういつた形のものを想定して作ったものであろう。70は先端部のみで、あるいは石匙の一部かも知れない。

石篦状石器（Fig.14—48～50、Fig.15—57～59、Fig.16—66、67、69、PL.29—48～50、PL.30—57～59、PL.31—66、67、69）

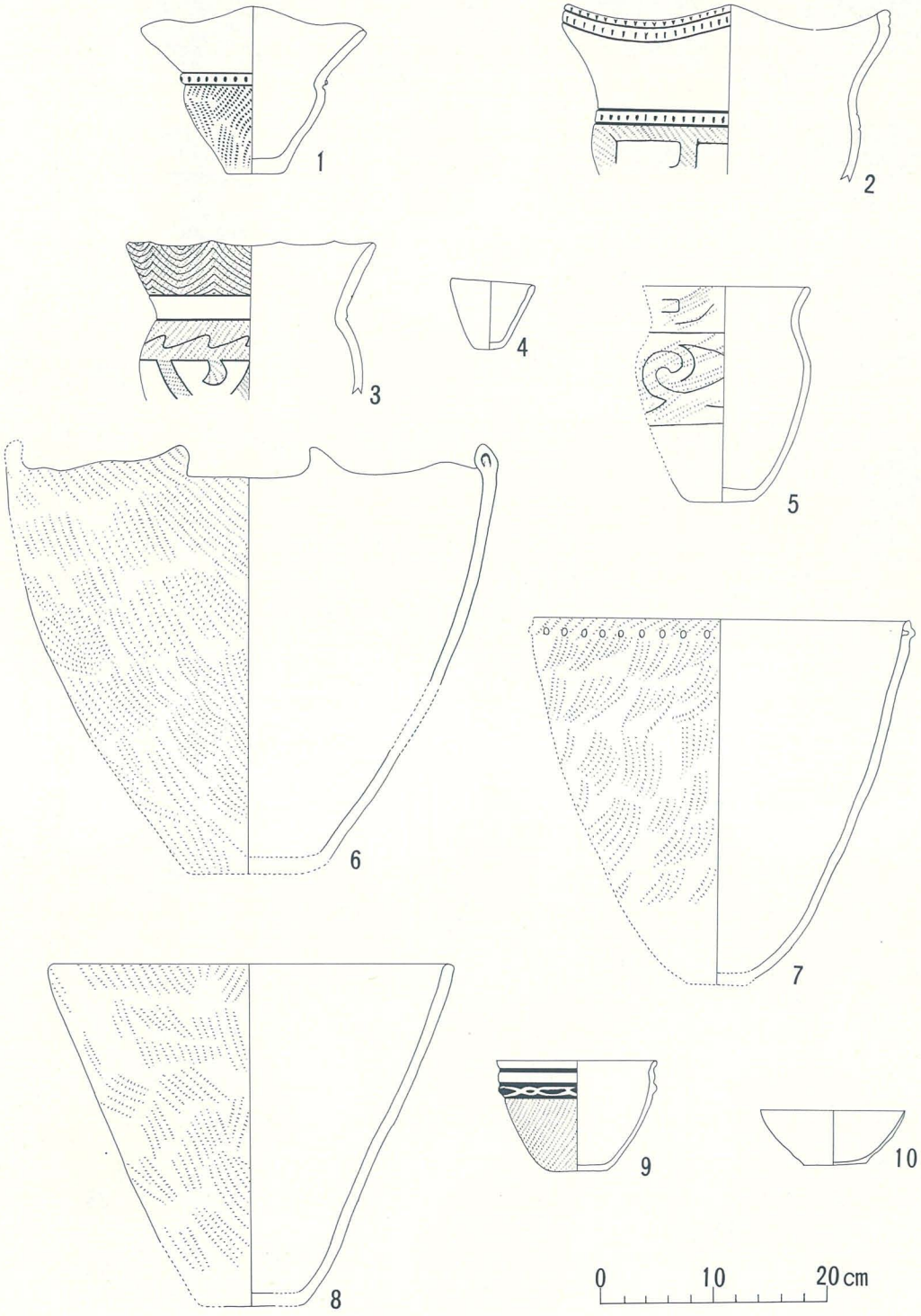


Fig. 5　土器実測図

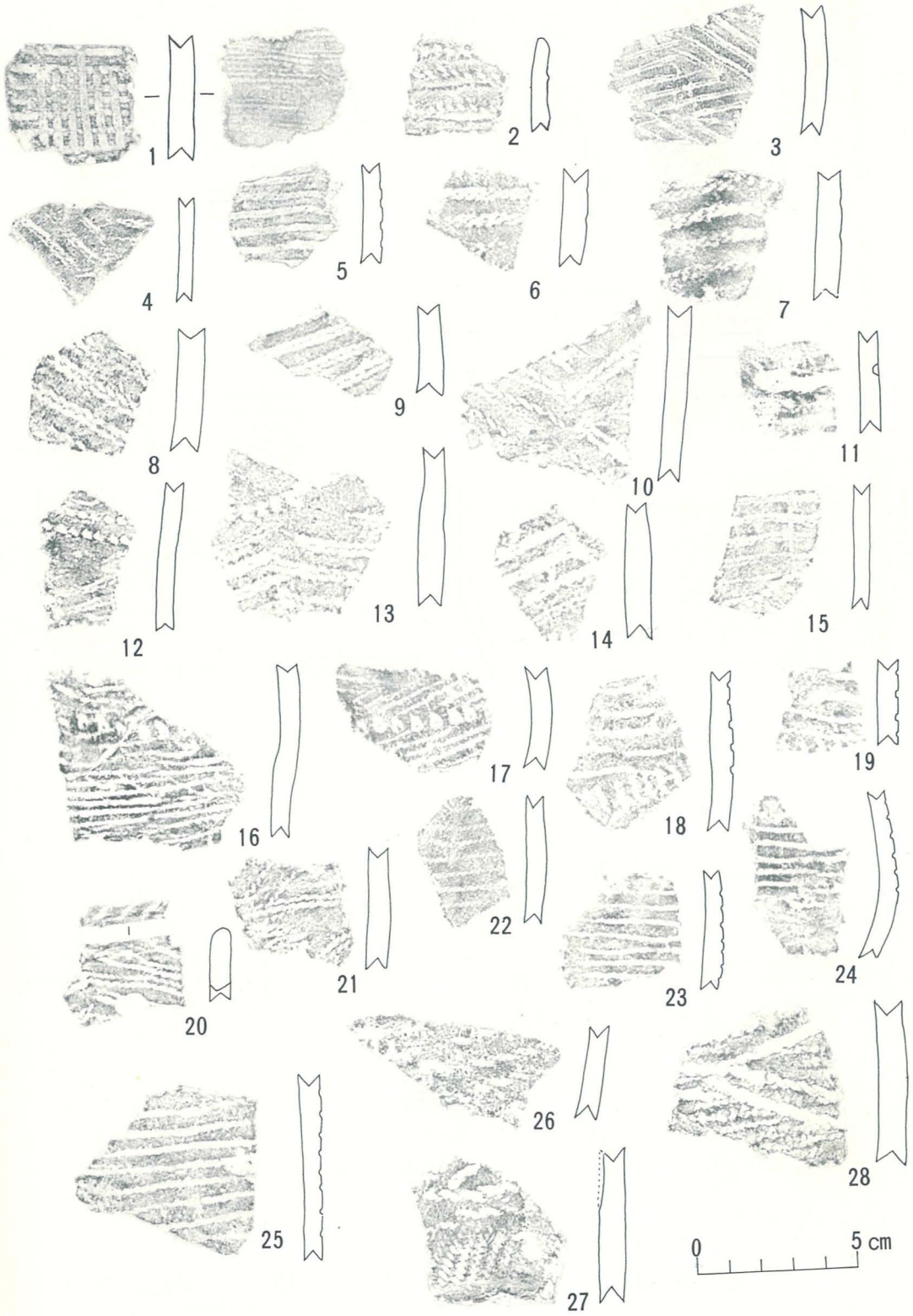

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
5 cm

Fig. 6　土器拓影（1）

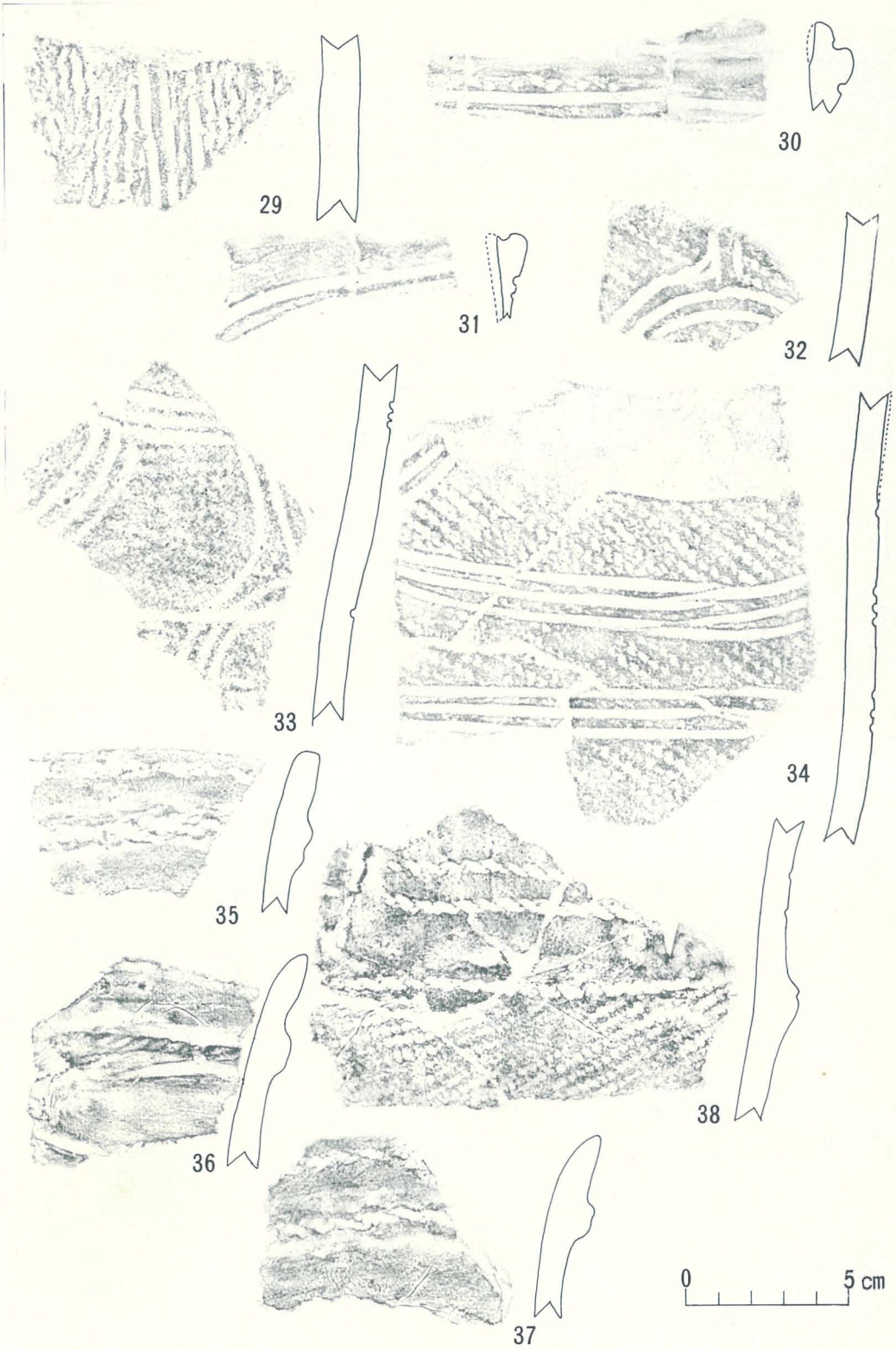


Fig. 7　土器拓影（2）

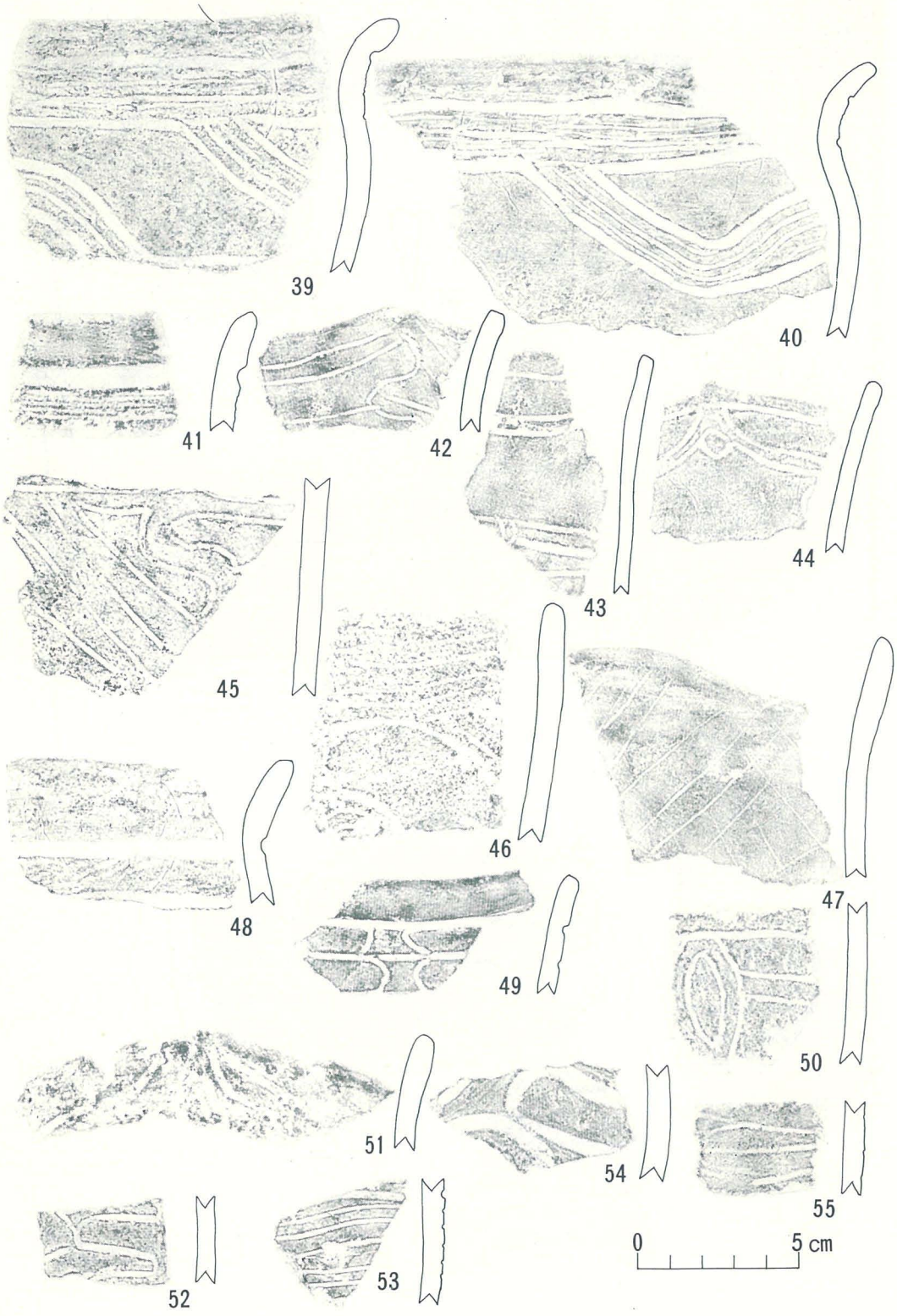


Fig. 8　土器拓影（3）

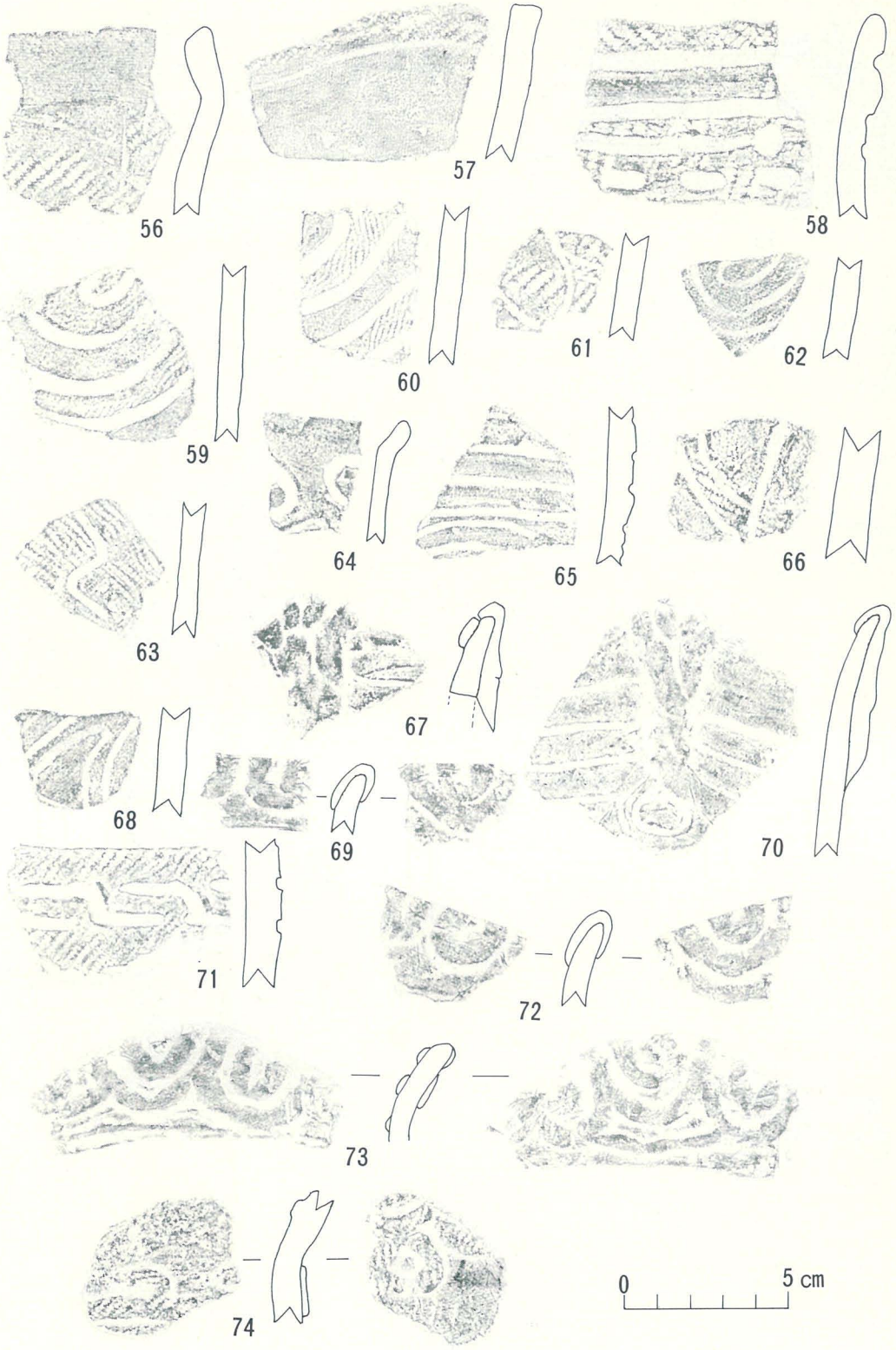


Fig. 9　土器拓影（4）

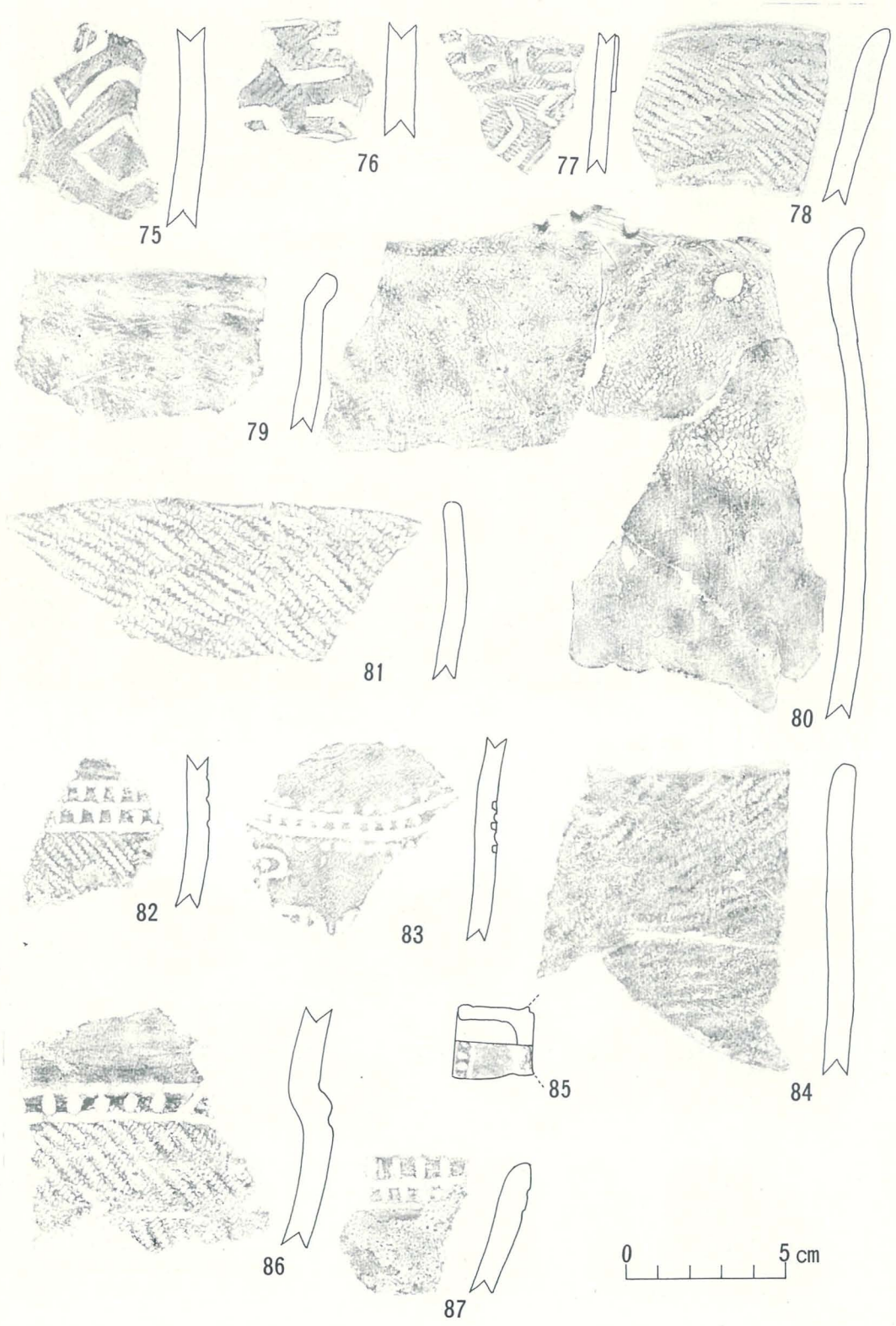


Fig. 10　土器拓影（5）

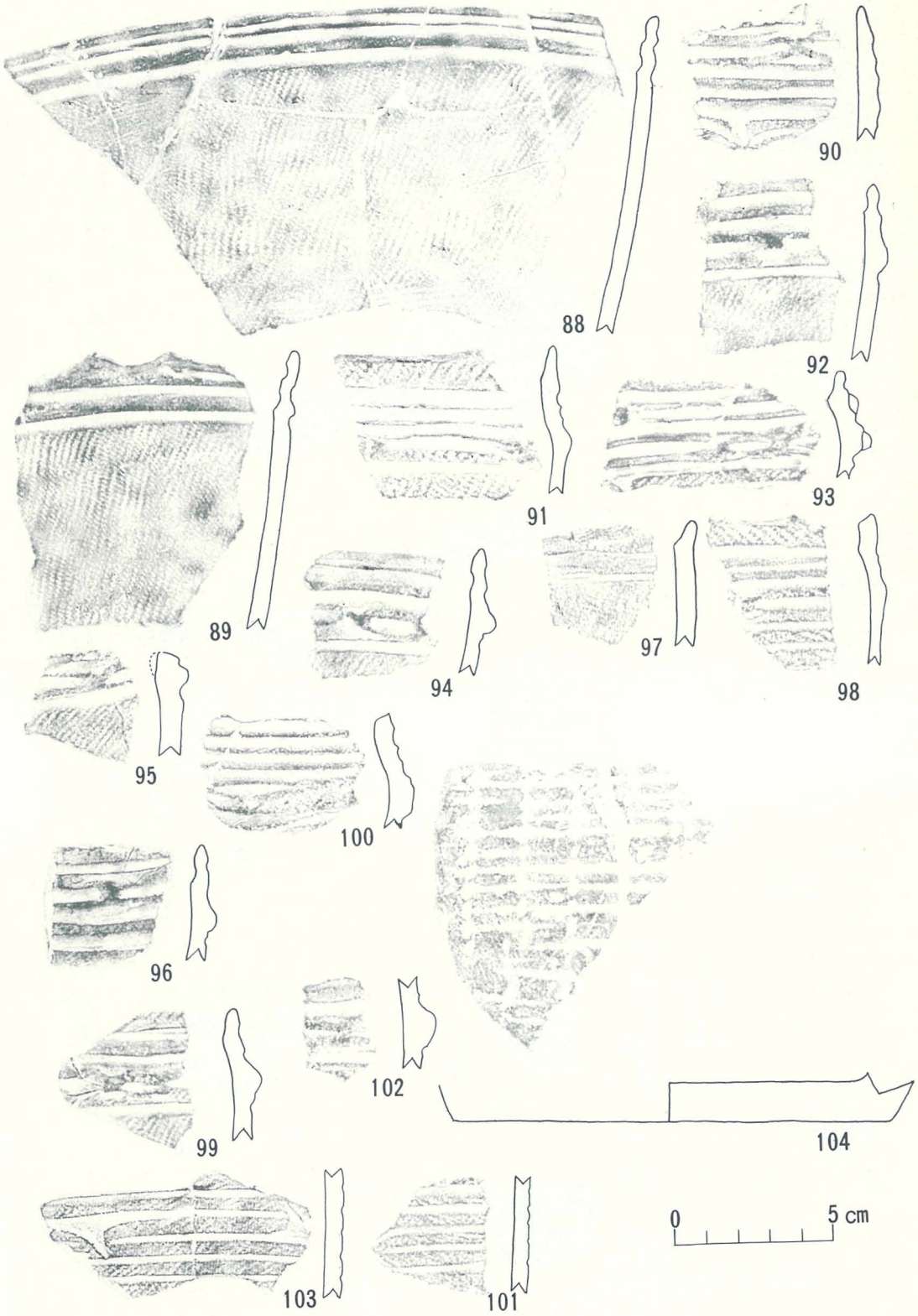


Fig. 11　土器拓影（6）

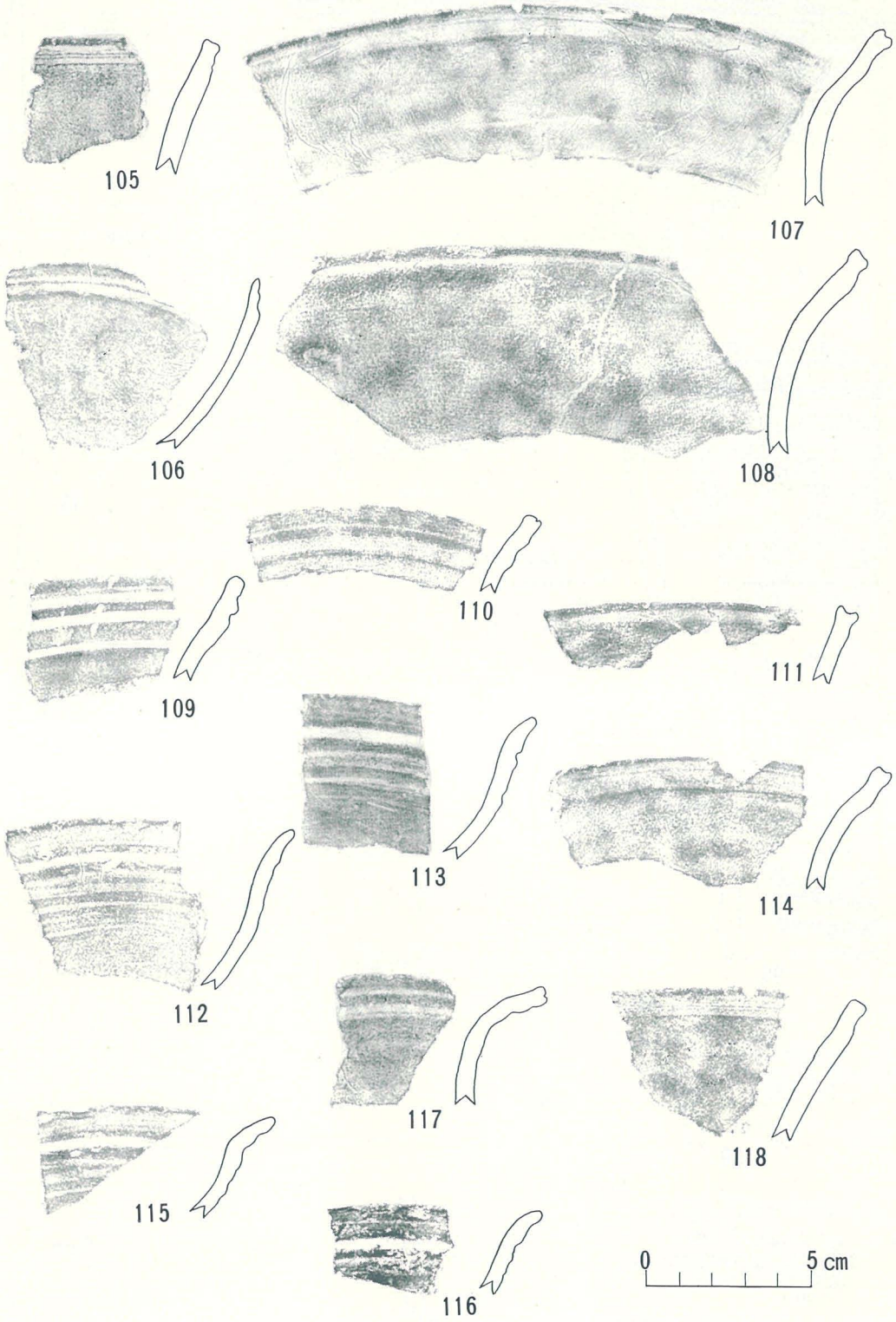


Fig. 12　土器拓影（7）

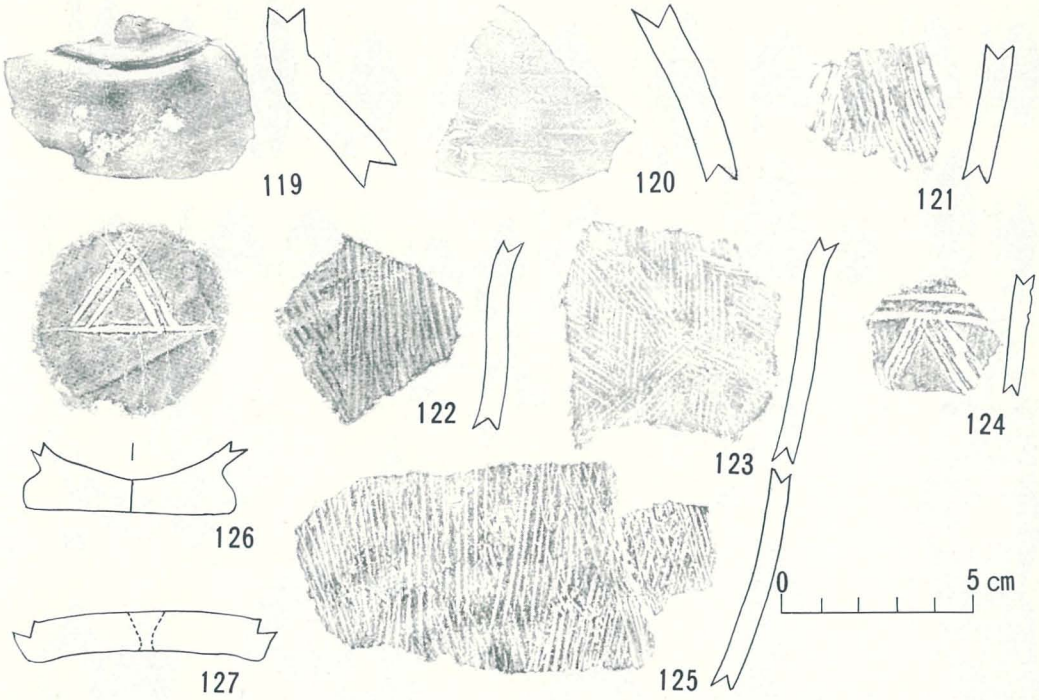


Fig. 13　土器拓影（8）

短冊形ないしは楕円形に近い形を呈している。片面には主要剝離面を残し、他の面には剝離の際の稜線を残すなど、比軋的高くなっている。全縁にわたって調整加工を施こしており、先端は片刃状を呈している。基部には打撃面を残しているものが多く、破損員は一見石槍のようにみえるが、そのことによって見わけがつく。またナイフ状石器よりも巾広に形成されている。

石斧（Fig.17—95～98、PL.32—95～98）

磨製のものと打製のものがある。95は磨製のもので定角式と呼ばれるものである。刃部は蛤刃状に形成されている。98は刃部を欠いている。側縁部に浅い溝があり、これは磨切手法の痕跡と思われる。側縁部には更に敲打の痕跡を残している。97は小型で刃部を欠くが片刃状のものと思われる。打製のものは96で、自然石の長楕円形のものの一端に打ち欠きによつて刃部を作出している。

磨石（Fig.17—100、PL.32—100）

扁平な楕円形の自然石を利用しているもので、両面に短軸方向に平行に磨った痕跡を残している。また、両端および両側縁に敲打の痕跡を残している。

刃器（Fig.16—72、73、76～94、Fig.17—99、PL.31—72、73、76～94、PL.17—99）

不定形な剝片の一部を調整加工して刃部を作出したものである。

これらの石器の出土区、層位、石質、計測値については表1に示した。

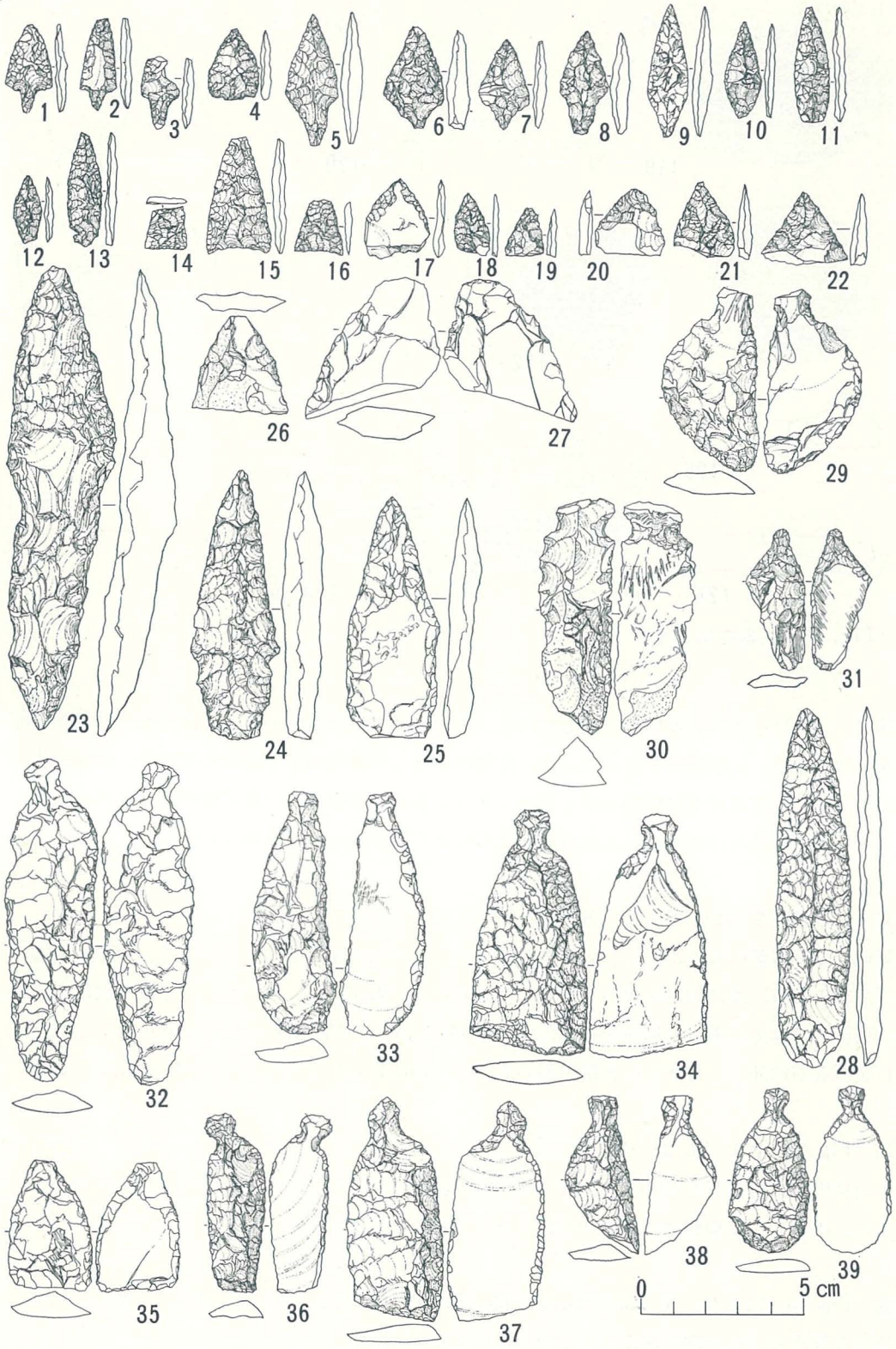


Fig. 14　石器実測図（1）

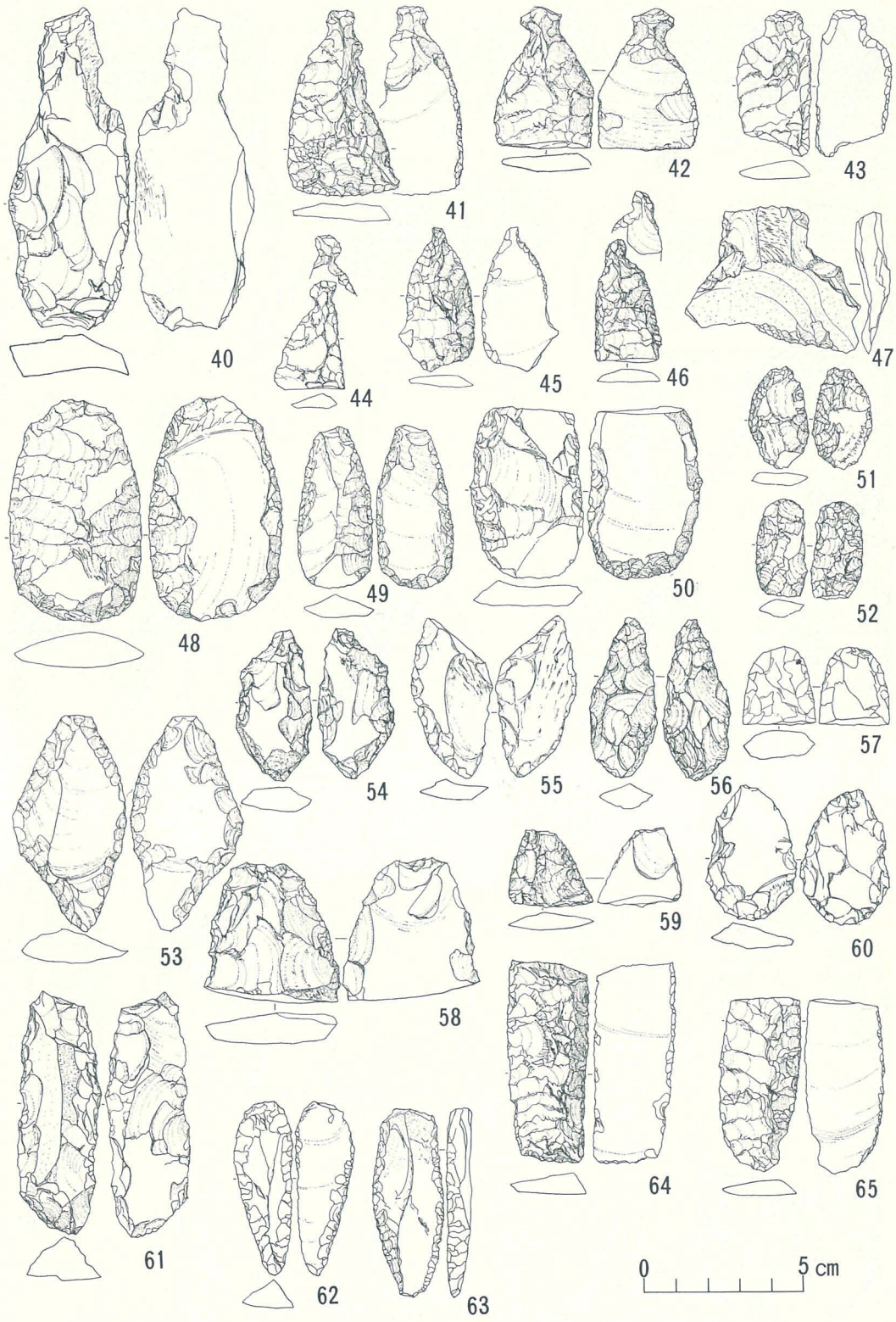


Fig. 15　石器実測図（2）

Fig. 16　石器実測図（3）

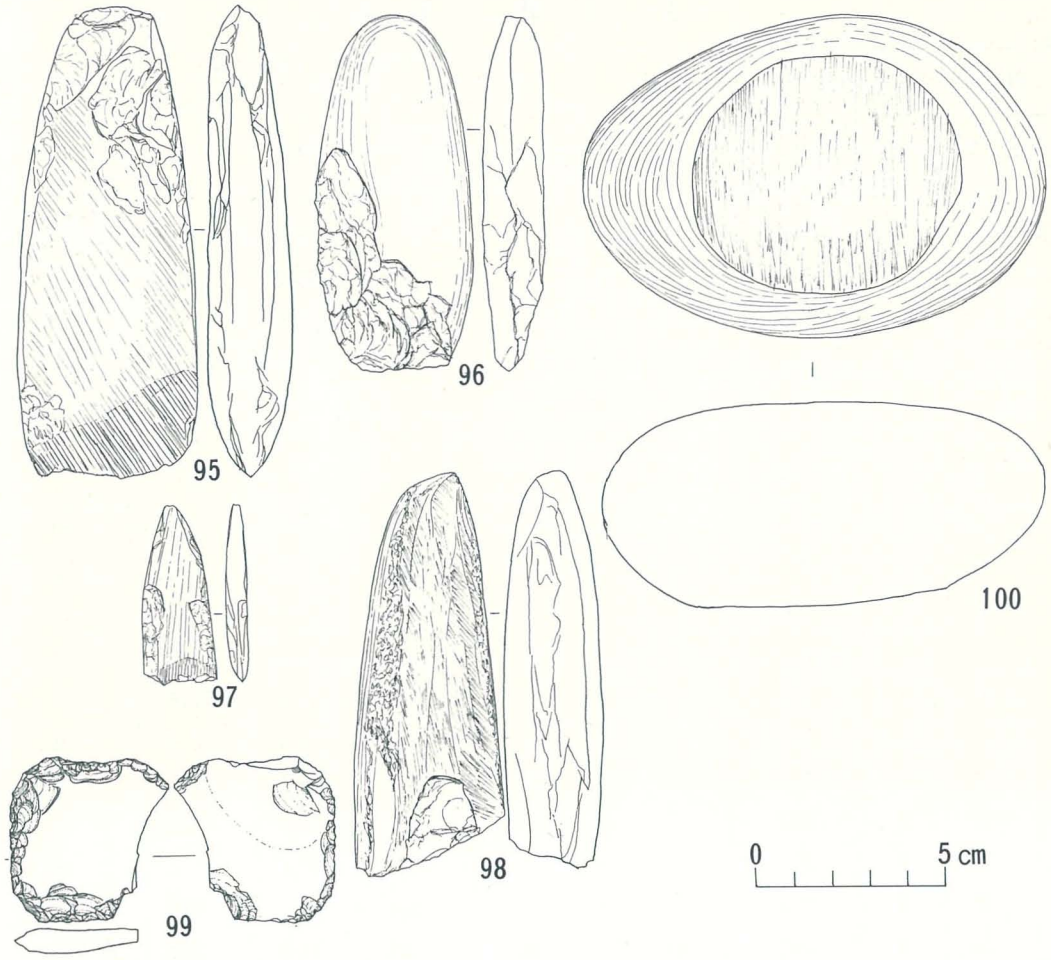


Fig. 17　石器実測図（4）

表1 石器一覧表

Fig.No.	層位	出土区	名称	計測値 (mm) たて	よこ	あつさ	石質
14—1	Ⅱ	B 3	石鏃	26.5	14.4	4	lp.
2	Ⅰ	E 9	〃	28	11.2	3	〃
3	Ⅰ	E15	〃	22	11.4	3.5	〃
4	Ⅱ	F 5	〃	21.4	25.2	3.6	〃
5	Ⅰ	G12	〃	4.2	15.6	6.1	ch.
6	Ⅱ	F 4	〃	30.9	18.1	7.4	lp.
7	Ⅰ	D25	〃	27.2	16	6.3	〃
8	Ⅰ	F 5	〃	31.5	14.5	6.4	〃
9	Ⅱ	C 1	〃	40.6	12.1	5.3	〃
10	Ⅰ	F 5	〃	29.6	11.7	2.8	ob.
11	Ⅰ	F 6	〃	35.3	11.1	3.4	lp.
12	Ⅰ	E15	〃	20.4	8.4	3	ob.
13	Ⅱ	E25	〃	3.5	10.4	3.6	〃
14	Ⅰ	F 5	〃	13	12.8	2.4	〃
15	Ⅱ	F14	〃	35.5	19.9	3.8	lp.
16	Ⅰ	E 4	〃	15.5	15.1	2.6	〃
17	Ⅱ	D 2	〃	22.1	19.4	3.3	〃
18	Ⅱ	F 5	〃	19.3	10.7	2	ob.
19	Ⅱ	E 6	〃	5.1	7	2.6	〃
20	Ⅰ	D 3	石槍	20	21.5	3.8	lp.
21	Ⅱ	E 5	〃	23.2	18.6	5.1	ob.
22	Ⅱ	F 5	〃	21.5	26.4	4.9	〃
23	Ⅱ	C 1	〃	142.5	32.2	14.5	lp.
24	Ⅰ	F 3	〃	81.8	27.5	11.3	ob.
25	Ⅰ	F 6	〃	73.2	28.1	8.9	ch.
26	Ⅰ	B 2	〃	29	29.3	7.5	ob.
27	Ⅰ	B 1	〃	58.6	31.1	11.7	
28	Ⅱ	E 4	〃	110.1	23.2	8.9	lp.
29	Ⅱ	E 3	石匙	52.9	28.5	8.5	〃
30	Ⅱ	D 2	〃	71.4	22.7	15.2	pt.
31	Ⅱ	F 5	〃	43.4	17.6	6.1	lp.
32	Ⅱ	F 6	〃	98.8	27.7	7.4	〃
33	Ⅰ	C 6	〃	74.6	25	8.4	〃
34	Ⅱ	B 5	〃	69.4	29.3	6.8	〃
35	Ⅰ	B 2	〃	40.8	26.7	8.8	ch.

Fig. No.	層位	出土区	名称	計測値 (mm) たて	よこ	あつさ	石質
36	Ⅰ	E 5	石匙	55.6	17.4	6.6	lp.
37	Ⅰ	C 5	〃	74.5	36.1	8.5	〃
38	Ⅱ	F 5	〃	49.4	19.2	7.3	ob.
39	Ⅰ	F 9	〃	50.4	29.6	6.1	lp.
15—40	Ⅰ	B 2	〃	10.2	38.1	16.6	〃
41	Ⅰ	C 5	〃	58	33.3	7.5	hd. sh.
42	Ⅰ	F 4	〃	43.5	30.6	7.9	lp.
43	Ⅰ	E 9	〃	49.5	23.4	5.6	〃
44	Ⅰ	E 3	〃	34.2	22	6.6	〃
45	Ⅰ	E 5		44.6	23.7	4.1	〃
46	Ⅰ	D 5		39	21.3	5.5	〃
47	Ⅰ	E 6	〃	39.6	54.3	10.1	〃
48	Ⅰ	E 4	石篦状石器	68.8	41.3	11.8	〃
49	Ⅰ	F 3	〃	49.3	23.2	7.8	〃
50	Ⅱ	E 2	〃	53.2	34.7	10.1	hd. sh.
51	Ⅱ	F 8	石鏃	31.4	18.9	4.4	ob.
52		D 5	〃	30	11	5.9	〃
53	Ⅰ	E 5	石槍	66.8	35.5	11.3	hd. sh.
54	Ⅱ	F 5	〃	46.2	24	8.1	pt.
55	Ⅱ	E 2	〃	51.0	24.5	7.4	lp.
56	Ⅱ	E 2	〃	49.2	21	10.2	〃
57	Ⅰ	D 3	石篦状石器	24.6	21.9	9.2	ch.
58	Ⅱ	E 2	〃	41.1	41.0	11.1	hd. sh.
59	Ⅰ	C 1	〃	24.4	25.2	5.0	〃
60	Ⅰ	D 5	石槍	41.8	27.6	9.5	lp.
61	Ⅰ	C 6	ナイフ状石器	75.5	25.3	13.0	hd. sh.
62	Ⅰ	D 4	〃	53.3	18.3	9.4	lp.
63	Ⅰ	F 16	〃	58.7	22.5	6.7	〃
64	Ⅰ	E 5	石匙	62.2	25.3	6.8	〃
65	Ⅰ	C 8	〃	54.0	24.9	3.8	〃
16—66	Ⅰ	B 7	石篦状石器	36.4	36.7	12.8	〃
67	Ⅰ	E 6	〃	30.0	27.7	9.0	〃
68	Ⅰ	B 3	ナイフ状石器(?)	24.6	32.2	6.7	hd. sh.
69	Ⅰ	E 3	石篦状石器	24.3	39.4	7.0	ob.
70	Ⅰ	D 4	ナイフ状石器(?)	22.5	16.0	5.6	lp.
71	Ⅱ	B 2	石匙 (?)	23.9	20.7	5.1	ob.

Fig.No.	層位	出土区	名称	計測値 (mm) たて	よこ	あつさ	石質
72	Ⅰ	E 6	刃器	36.2	41.1	10	lp.
73	Ⅱ	C 14	〃	41.3	30.5	11.7	〃
74	Ⅰ	E 5	石匙	29.0	23.0	6.0	〃
75	Ⅰ	C 1	〃	32.0	36.1	4.3	〃
76	Ⅰ	B 3	刃器	53	40.3	5.6	ob.
77	Ⅰ	E 5	〃	61	52	8.9	ba.
78	Ⅱ	E 6	〃	44.9	29.3	11	ob.
79	Ⅰ	F 6	〃	48.2	28.5	9.3	lp.
80	Ⅰ	F 2	〃	52.2	27.4	7.5	〃
81	Ⅱ	B 4	〃	84	40.9	9	〃
82	Ⅱ	E 2	〃	85.7	68.7	20	hd.sh.
83	Ⅰ	E 4	〃	57.2	32.5	9.5	lp.
84	Ⅱ	E 2	〃	40.5	34.5	8.5	〃
85	Ⅱ	B 2	〃	55.4	28	6.3	〃
86	Ⅱ	E 2	〃	42	23	7.4	〃
87	Ⅰ	F 7	〃	57.6	50.2	5.5	ba.
88	Ⅰ	D 3	〃	52,1	29.5	8.2	lp.
89	Ⅱ	E 2	〃	59.5	27.4	11.3	〃
90	Ⅱ	E 2	〃	47.4	27.5	10.4	〃
91	Ⅰ	E 4	〃	35.8	16.0	7.5	〃
92	Ⅰ	B 1	〃	43.3	34.5	8.6	〃
93	Ⅰ	F 6	〃	31.6	24.8	6.0	〃
94	Ⅱ		〃	23.3	13.5	2.7	ob.
17—95	Ⅰ	B 3	石斧	123.5	47	21.9	gr.sch.
96	Ⅰ	B 2	〃	92.8	40.9	15.3	an.
97	Ⅱ	E 3	〃	47	18.8	56	gr.sch.
98	Ⅰ	F 3	〃	106	50.5	29.5	〃
99	Ⅰ	B 5	刃器	41.6	42.1	8.6	sh.
100	Ⅰ	E 5	磨石	119	84.5	51.2	bl.sl.

石質記号

ob：黒耀石、　hd.sh：硬質頁岩、　ch：硅岩、　lp：流紋岩、　pt：松脂岩、　gr.sch：緑色変岩、
ba：玄武岩、　bl.sl：黒色粘板岩、　an：安山岩

Ⅳ 総　　括

本遺跡1,879.62㎡の発掘調査の結果、遺構らしきものは、すべて近年におけるニシン漁および畑作耕作に伴う柱穴、馬鈴薯貯蔵穴、肥溜などであった。

出土遺物としては土器片5,805点、剝片を含めた石器類924点であった。これらの出土遺物は、人為的に攪乱を受けた第Ⅰ層および自然の営力によって攪乱した第Ⅱ層から出土したものである。これらの層位では、あらゆる種類の遺物が混在しており、遺物を層位に基づいて分類する根拠を得ることができなかった。したがって他の遺跡における発掘調査の結果を基準として対比し、類別分類を試みる方法をとらざるを得なかった。こうして分類したものは大きくA類～Ⅰ類の9類に分けられ、それらは縄文早期から擦文期にいたる各期にわたっている。

なお、土器片は小片が多く、そのうえ磨滅しているものもかなりあったため、詳細がわからず、あるいは分類にあたって誤認しているものもあるかも知れない。

A類土器は貝殻文を有するもので、この種のものは一般に縄文早期に位置づけられている。道南部における代表的な遺跡としては函館市住吉町遺跡（註1）、同梁川町遺跡（註2）などがあり、上ノ国町では大澗遺跡（註3）をあげることができる。格子目状に施文されているという点では青森県早稲田貝塚（註4）のあるものに共通しているといえる。だとすれば底部は尖底であることも考えられる 。

B類土器は梁川町式土器（註5）と呼ばれている範囲の中に入るもので、春日町（註6）の一部に共通するものがある。この種の土器はかなり広く分布しているようで、道東部においては、かなりまとまった資料を得ている遺跡がある。東釧路（註7）においては第Ⅱ群→第Ⅲ群→第Ⅳ群という編年がなされ、網走湖底（註8）においてはⅠ～Ⅷ群に分類し、Ⅰ群からⅧ群まで同一系統の文化として連続的に推移したものと考えている。東釧路における第Ⅲ群のあるもの、および第Ⅳ群に対比される本遺跡のものは、網走湖底の第Ⅴ群から第Ⅷ群までのいずれかに対比されるものであろう。もしそうだとすれば、本類は縄文・絡縄体圧痕文などを特徴とする早期の平底土器群のうちの、ある限定した時期の所産であることを示唆しているように思える。ただし、出土状態が不安定であることを考慮しなければならないことはいうまでもない。

C類土器は胎土、焼成などからみて円筒式土器とみられ繊維の混入からみて、下層式のいずれかであろう。

D類土器は、上ノ国町大安在B遺跡（註9）で検出されたものに対比されよう。同報告では「現在のところ、北海道では未検出の土器である。」とし、青森県石神遺跡（註10）において類似の土器が認められているとして、円筒下層d_2式土器としては異質的なものに対比している。ともあれ今のところ資料が少なく、多くは言われない。今後の資料増加がまたれる。

E類土器は東北地方における大木 8b 式ないしはそれに後続するものに対比されるものであろう大木系土器は道西南部において数個所で検出されており（註11）（註12）、上ノ国町においてもワラビ岱B地点（註13）から比較的良好な資料を得ている。しかしその内容を検討するには資料不足の感がある。ただサイベ沢Ⅶ式土器(註14)および見晴町式土器（註15）に伴出関係が知られている。

F類土器は、縄文後期初期に位置づけられている青森県十腰内第Ⅰ群（註16）に対比されるグループである。ほかに秋田県大湯（註17）、北海道では入江（註18）、函館日吉E類（註19）、松前大津B遺跡第7群（註20）などがあげられる。なお、スノコ状の圧痕を有する底部もこのグループのものである可能性が強い（註21）。

G類土器は十腰内第Ⅱ群～第Ⅳ群に相当するものを一括して扱った。少し具体的に対比すれば、竹管様円形刺突文の連続したものは第Ⅱ群に含めているものに、花弁形の波状口縁をもち口縁部ないしは頸部に刻目を点列させたものは第Ⅲ群ないしはⅣ群であろう。ただし、十腰内でみられる羽状に施文した縄文は、型式分類上の指標のひとつとしてあげられているが、本類にはみられないことに注目しておかなければならないだろう。つぎに大型の粗製深鉢型土器についてであるが、十腰内Ⅴ群と呼ばれる貼瘤文を特徴とするものが本遺跡にみられないことから、角状突起を有するもの、突瘤文を有するものともに本類に伴う可能性が強い。

H類土器は大洞A式土器に対比されるもので、日ノ浜（註22）、添山（註23）、女名沢（註24）などがこれに相当する。

I類土器は復元された糸切底のものの1個ほか小片で、伴出関係は不明である。さしあたって検討を省くことにする。

石器は石鏃、石槍、石匙、ナイフ状石器、石篦状石器、石斧、磨石、刃器などで、特に縦形の石匙類の出土例が多いようである。材質は硅岩、硬質頁岩が多く、他に黒耀岩、緑色変岩、安山岩、流紋岩、松脂岩、玄武岩、黒色粘板岩ものもある。これらのの石器類は、縄文早期の所産とされている貝殻文土器にはすでに伴出しており（註25）、その伝統は縄文晩期まで続くものであるとされている（註26）。したがって本遺跡の場合、不安定な出土状況からいっても、A類～I類のいずれに伴うものであるか不明であるといわざるを得ない。

註

1、児玉作左衛門・大場利夫　「函館市住吉町遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』第8輯　北海道大学　1953。

2、大場利夫ほか　「函館市梁川町遺跡」　市立函館博物館　1955。

3、　大場利夫・半沢信一　「上ノ国大澗遺跡」『檜山南部の遺跡』　上ノ国町教育委員会、江差町教育委員会　1955。

4、角鹿扇三ほか　「早稲田貝塚」『北上考古会報告』1、北上考古会　1960。

5、3に同じ

6、児玉作左衛門、大場利夫　「函館市春日町出土の遺物について」『北方文化研究報告』第9輯　北海道大学　1954。

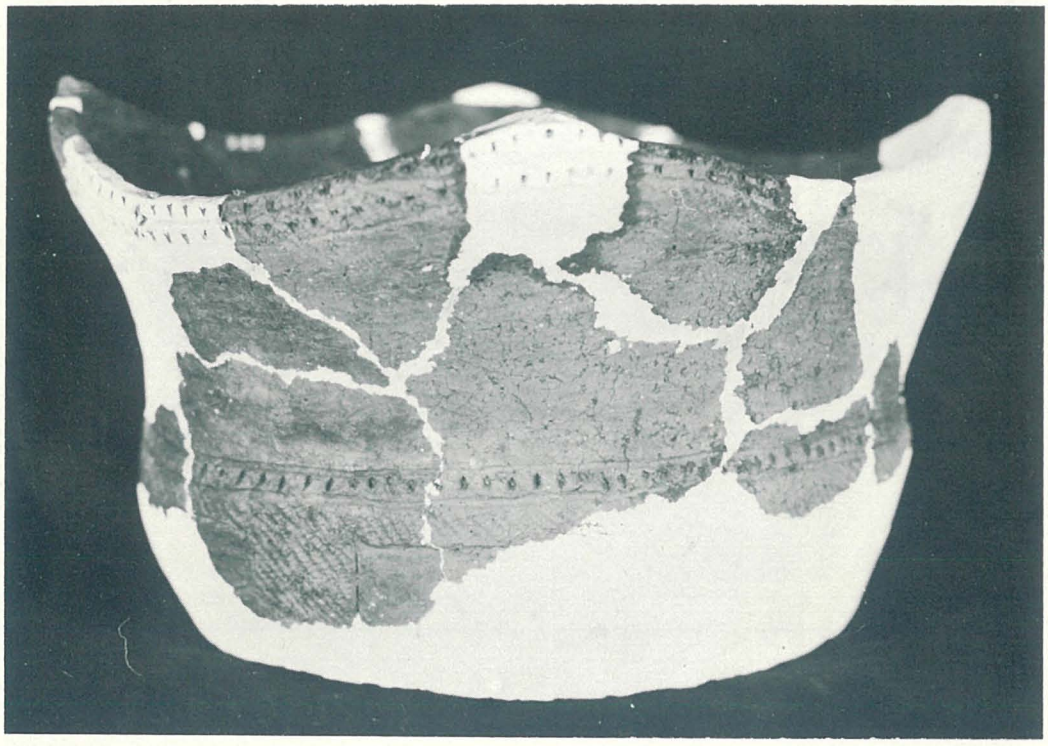
7、沢四郎ほか　「東釧路―東釧路貝塚発掘報告書―」　釧路市教育委員会　1962。

8、米村哲英ほか　「網走湖底遺跡」『網走市立郷土博物館報告』2、網走市立郷土博物館　1967。

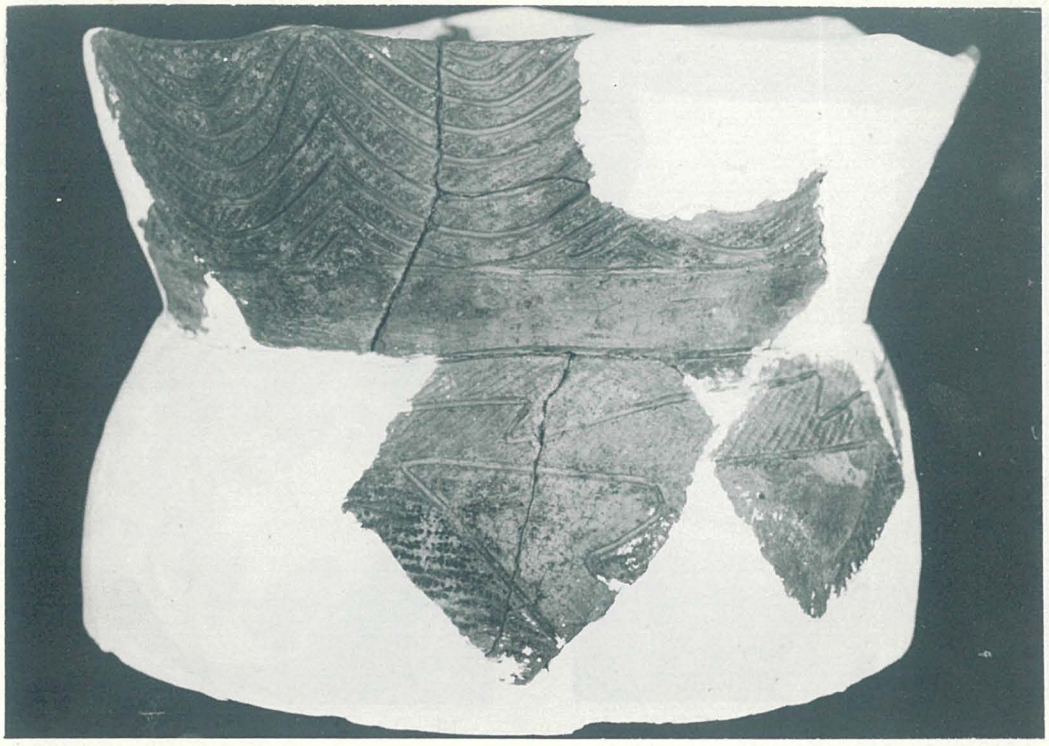
9、倉谷泰賢・小笠原忠久ほか　「大安在B遺跡―北海道檜山郡上ノ国町大安在B遺跡発掘調査報告書」上ノ国町教育委員会　1972。

10、江坂輝弥編　「石神遺跡」石神遺跡研究会　1970。
11、蛯子千代志「北海道西南部における同筒土器に伴出する大木系土器について」『桧山考古学研究会会誌』2　1973。
12、市立旭川郷土博物館資料。江差町出土資料。
13、渡部良三・松崎水穂・橋野正己「上ノ国町ワラビ岱遺跡B地点の遺物」『桧山考古学研究会会誌』1　1972。
14、大場利夫ほか「サイベ沢遺跡―函館郊外桔梗村サイベ沢遺跡発掘報告書」函館博物館　1958。
15、森田知忠・高橋正勝「サイベ沢B遺跡調査報告―北海道亀田郡亀田町における縄文文化中期末遺跡の緊急発掘―」　亀田町教育委員会、市立函館博物館　1967。
16、今井富士雄、磯崎正彦　「十腰内遺跡」『岩木山―岩木山麓古代発掘調査報告書―』　岩木山刊行会　1968。
17、斉藤忠ほか　『大湯環状列石』　文化財保護委員会　1953。
18、名取武光・峰山巌　「入江貝塚」『北方文化研究報告　第13輯』　北海道大学　1958。
19、千代肇ほか「函館市日吉遺跡発掘報告書」函館市日吉遺跡発掘調査団、市立函館博物館 1971。
20、斉藤傑、氏江敏文「松前町大津遺跡発掘報告」1974。
21、斉藤傑の教示による。松前大津B遺跡においては後期の土器では十腰内Ⅰ群に対比されるもので、同様な底部が数点出土したものは、このグループに属する可能性が強いという。
22、吉崎昌一　「縄文文化の発展と地域性　北海道」『日本の考古学』Ⅱ、河出書房新社　1965。
23、千代肇、落合治彦「北海道上磯町添山遺跡調査略報『北海道の文化』特集号　北海道文化財保護協会　1963。
24、市立旭川郷土博物館資料。
25、1に同じ。
26、22に同じ。

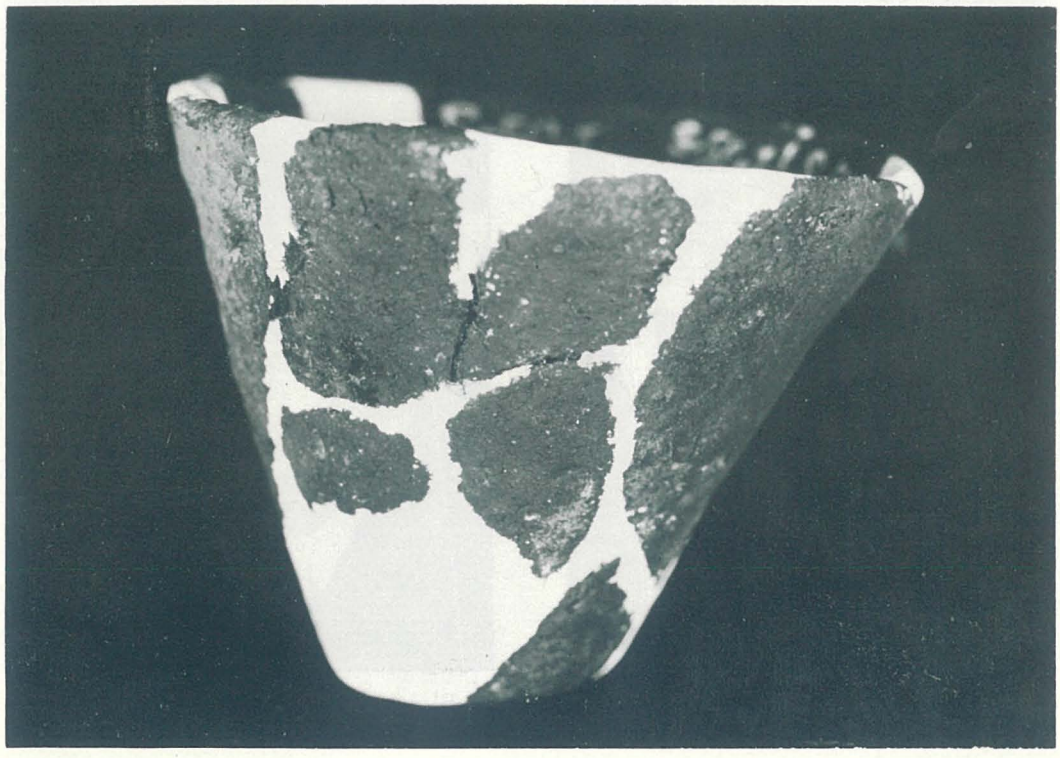
PL. 11　土器（1）



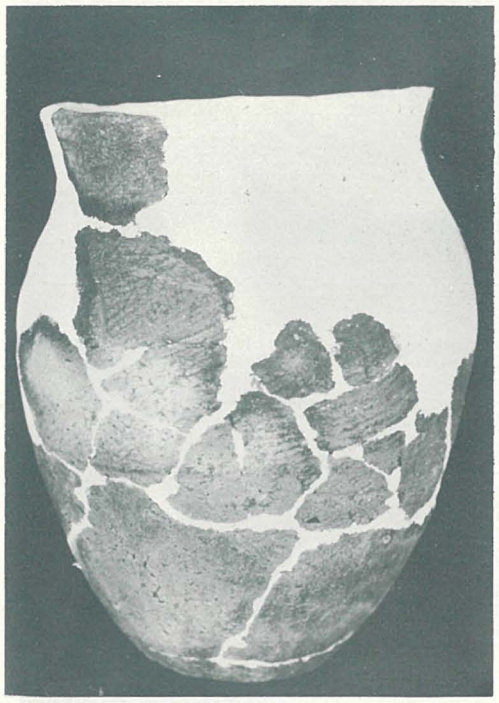
PL. 12　土器（2）



PL. 13　土器（3）



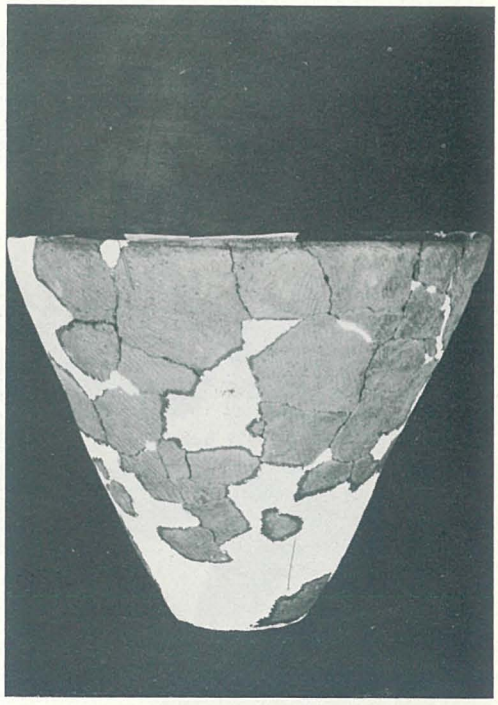
PL. 14　土器（4）



PL. 15　土器（5）

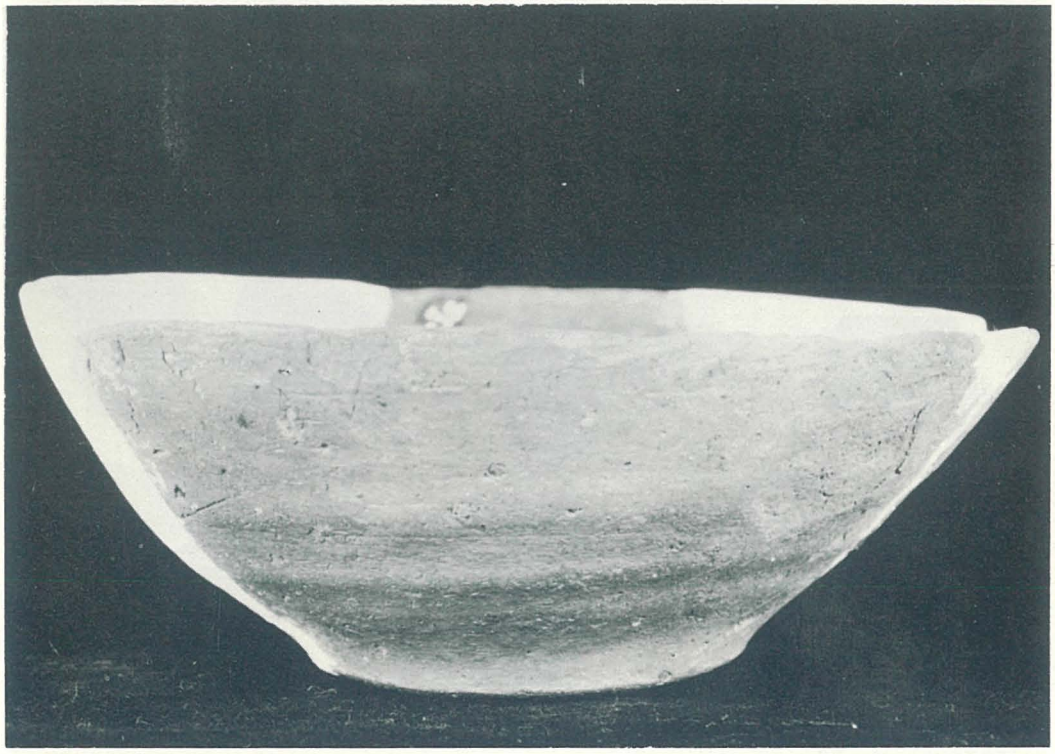
PL. 16　土器（6）

PL. 17　土器（7）

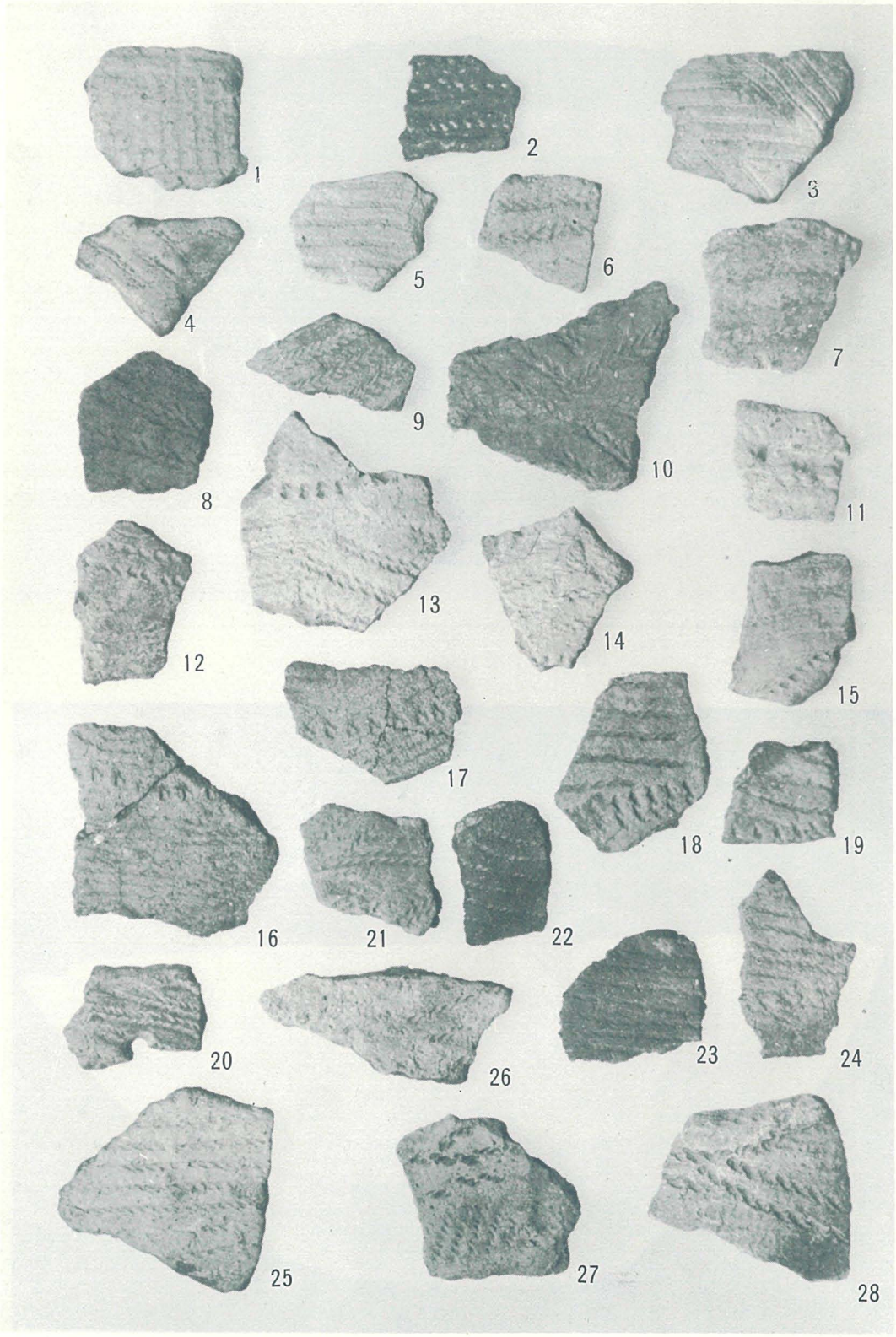


PL. 18　土器（8）

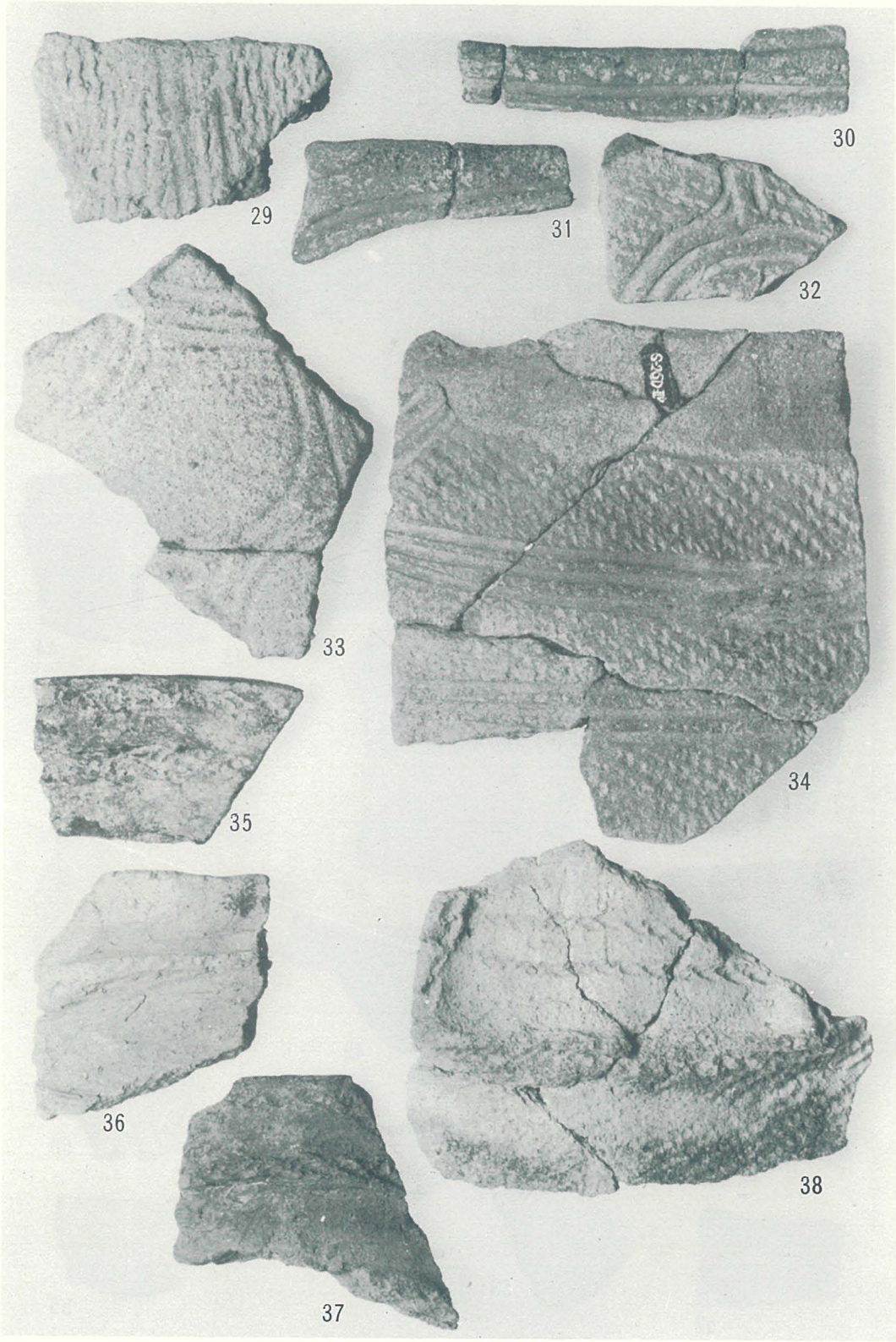
PL. 19　土器（9）



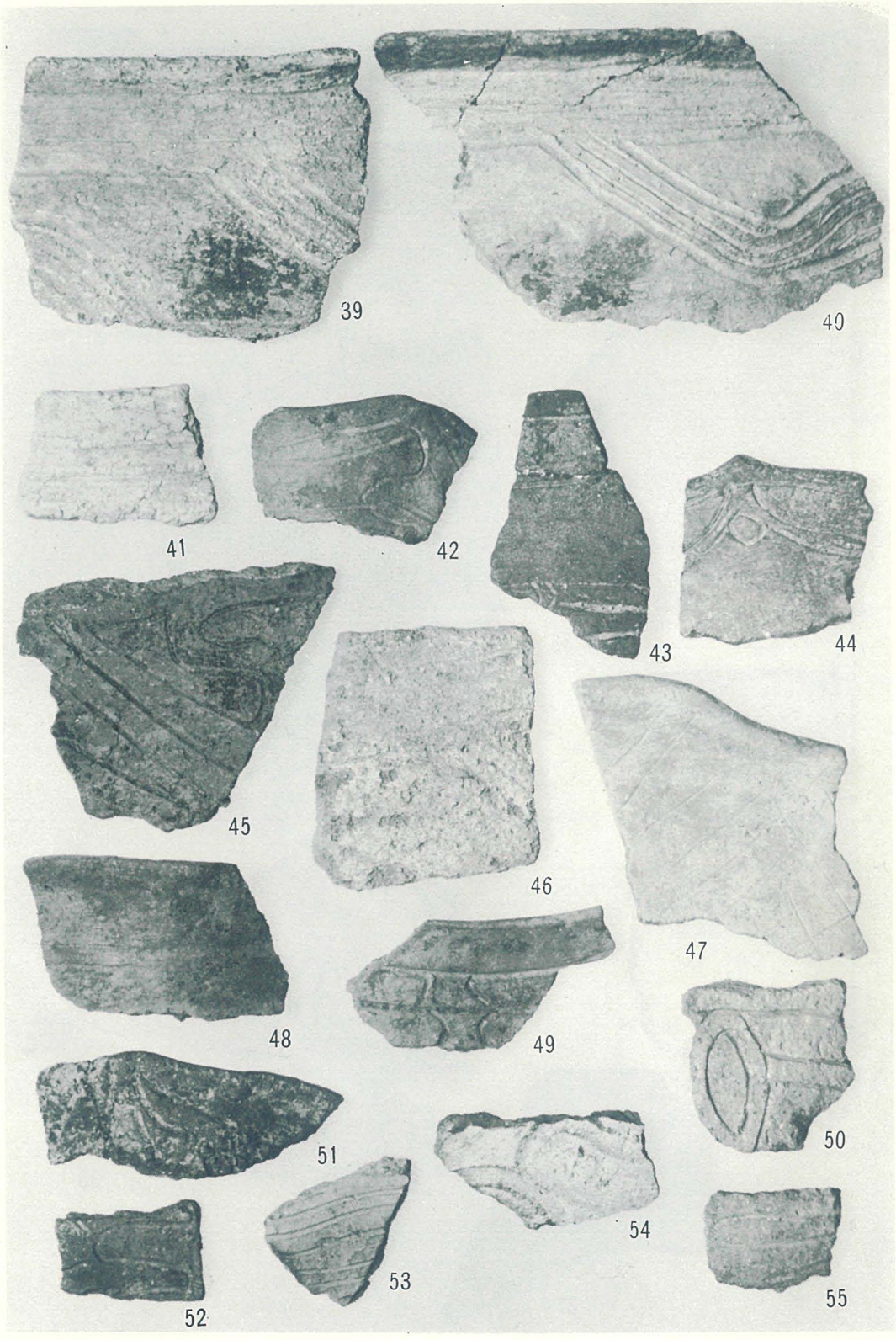
PL. 20　土器（10）



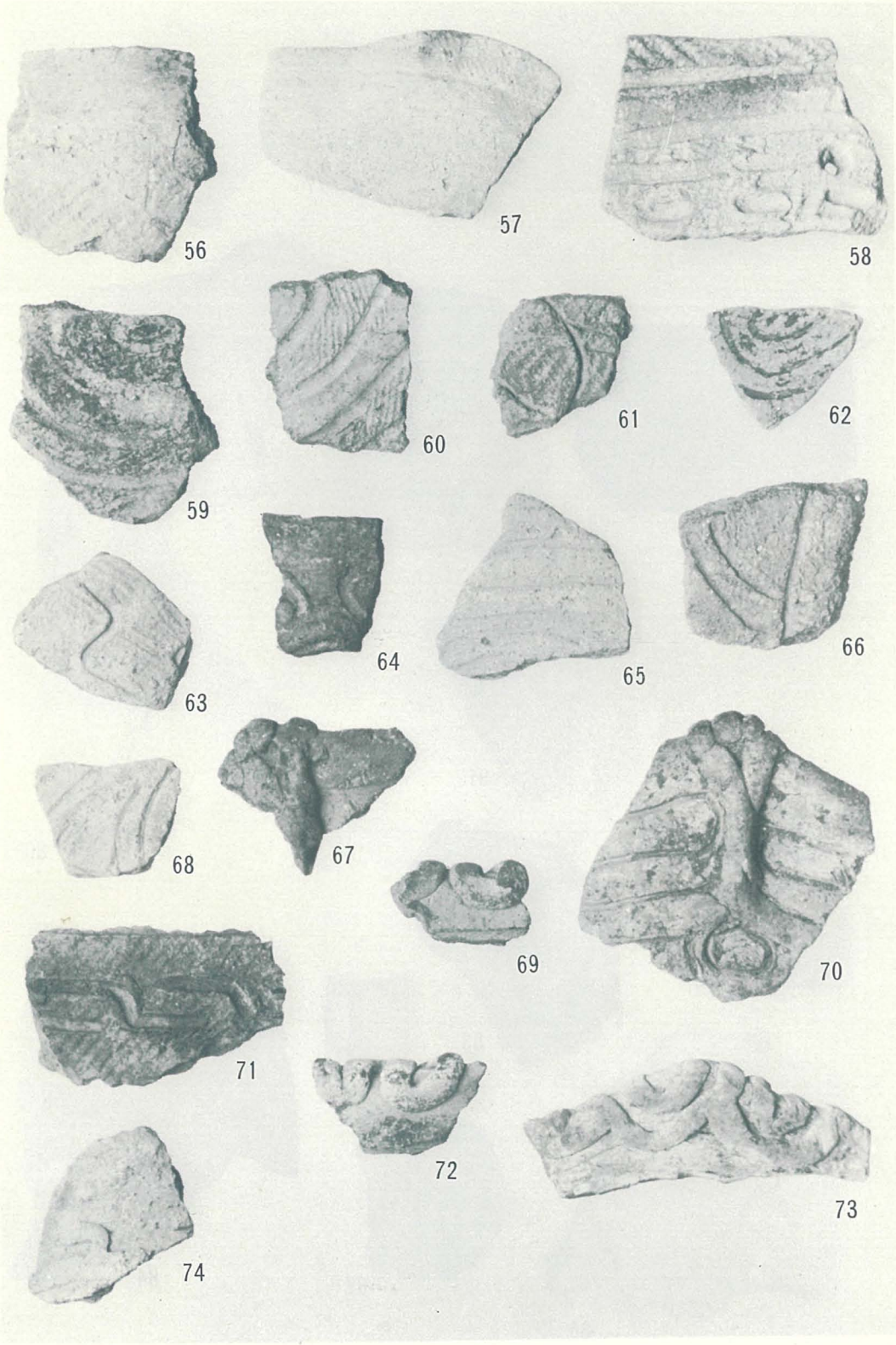
PL. 21　土器 (11)



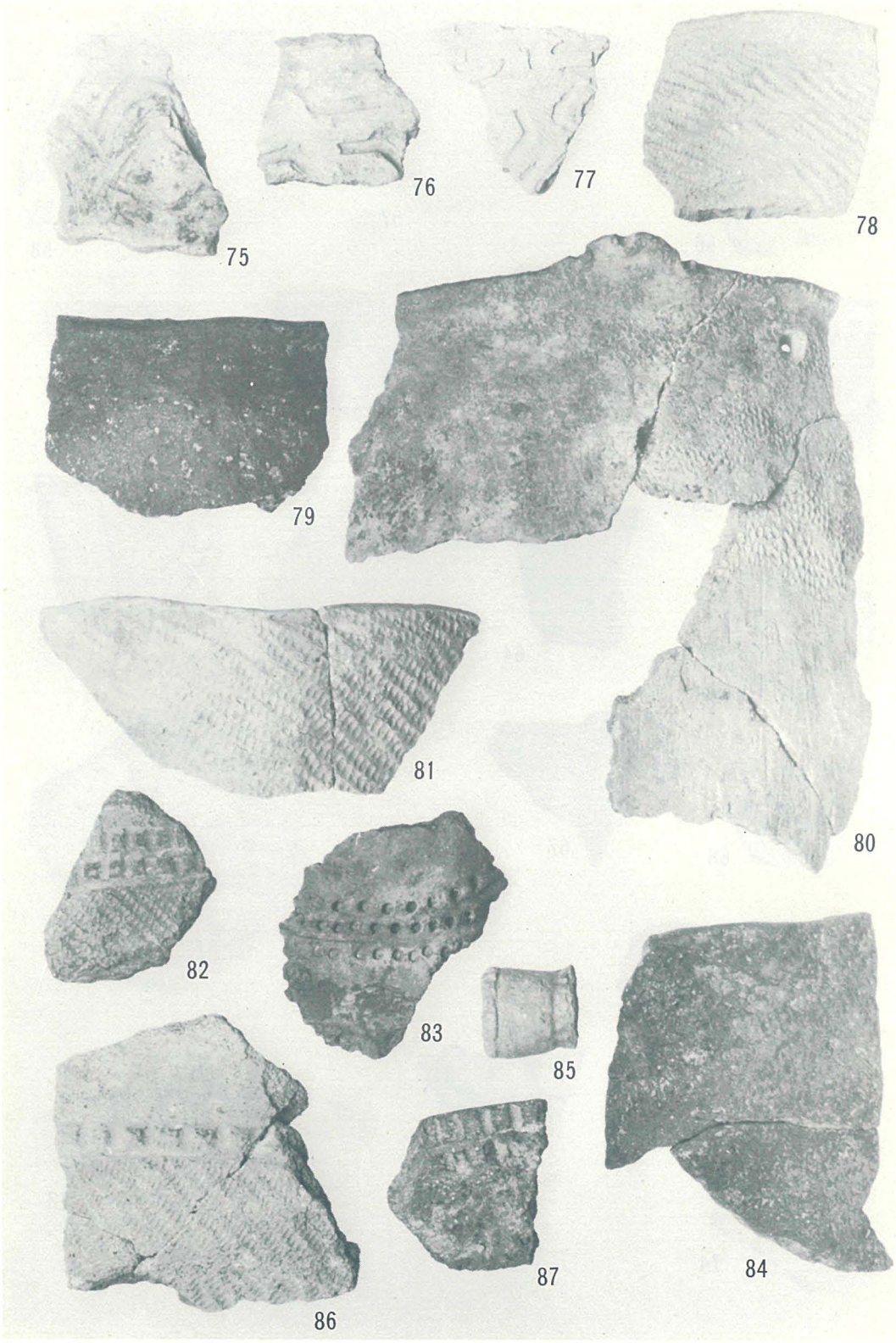
PL. 22　土器 (12)



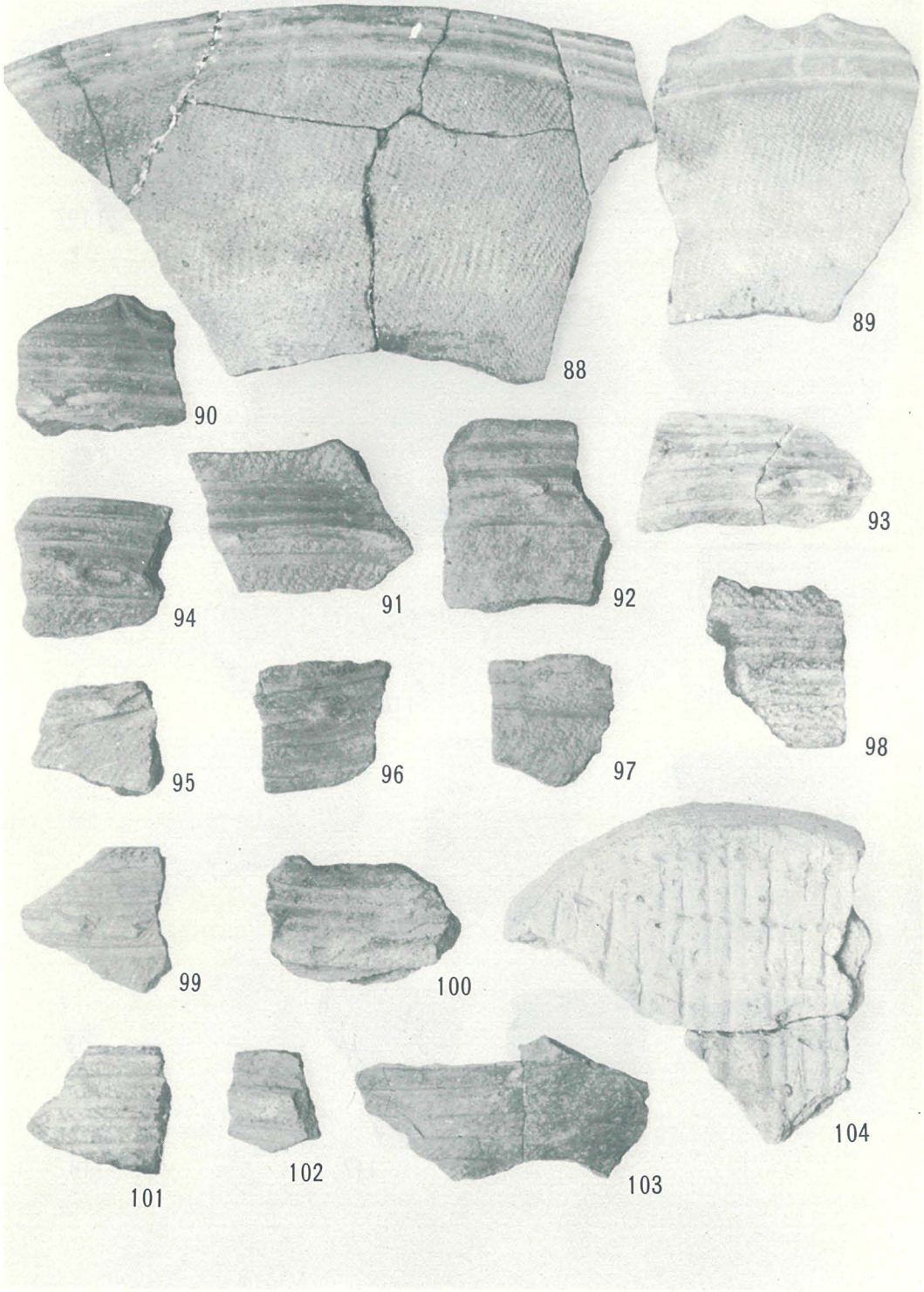
PL. 23　土器 (13)



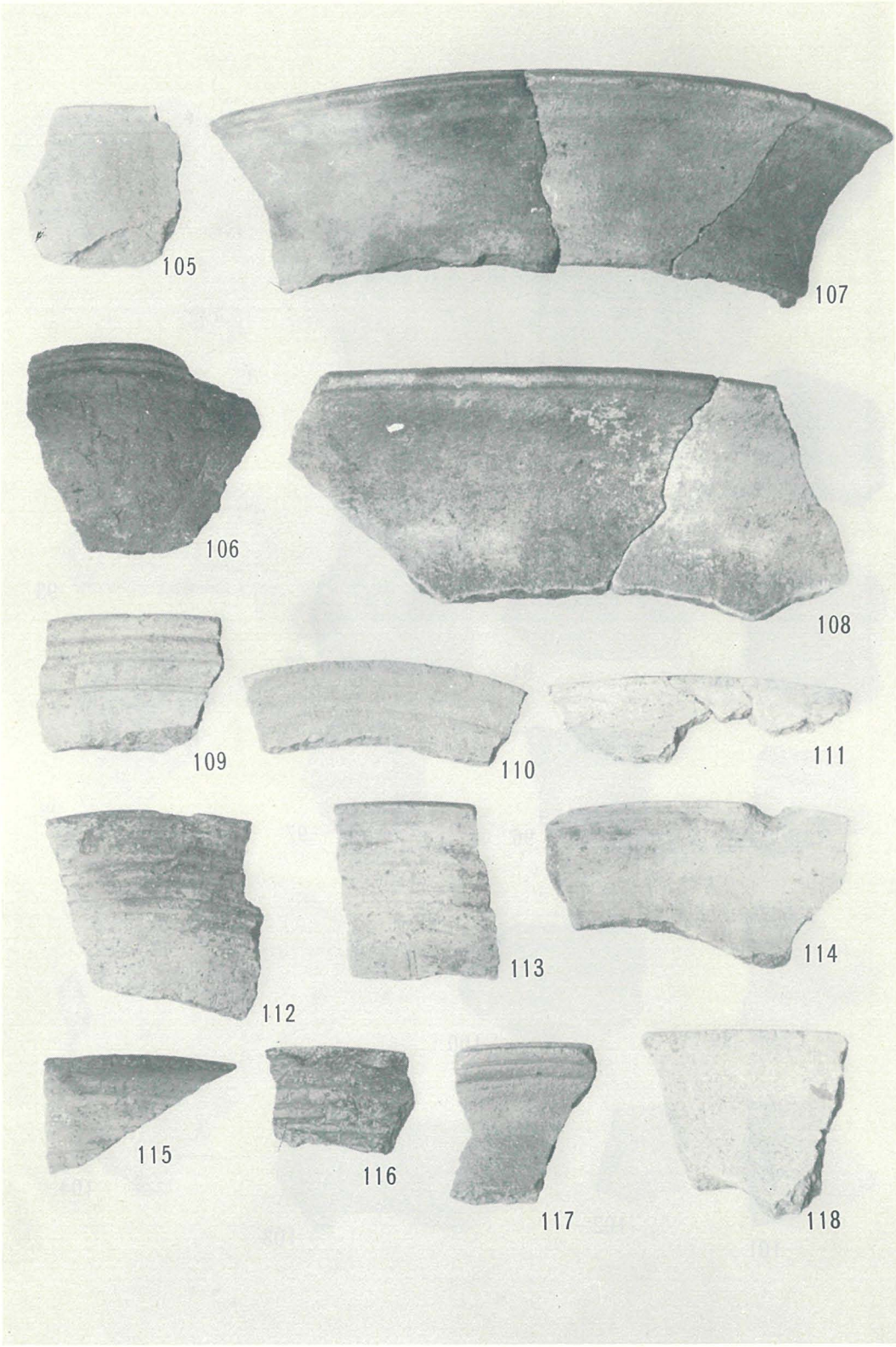
PL. 24　土器 (14)



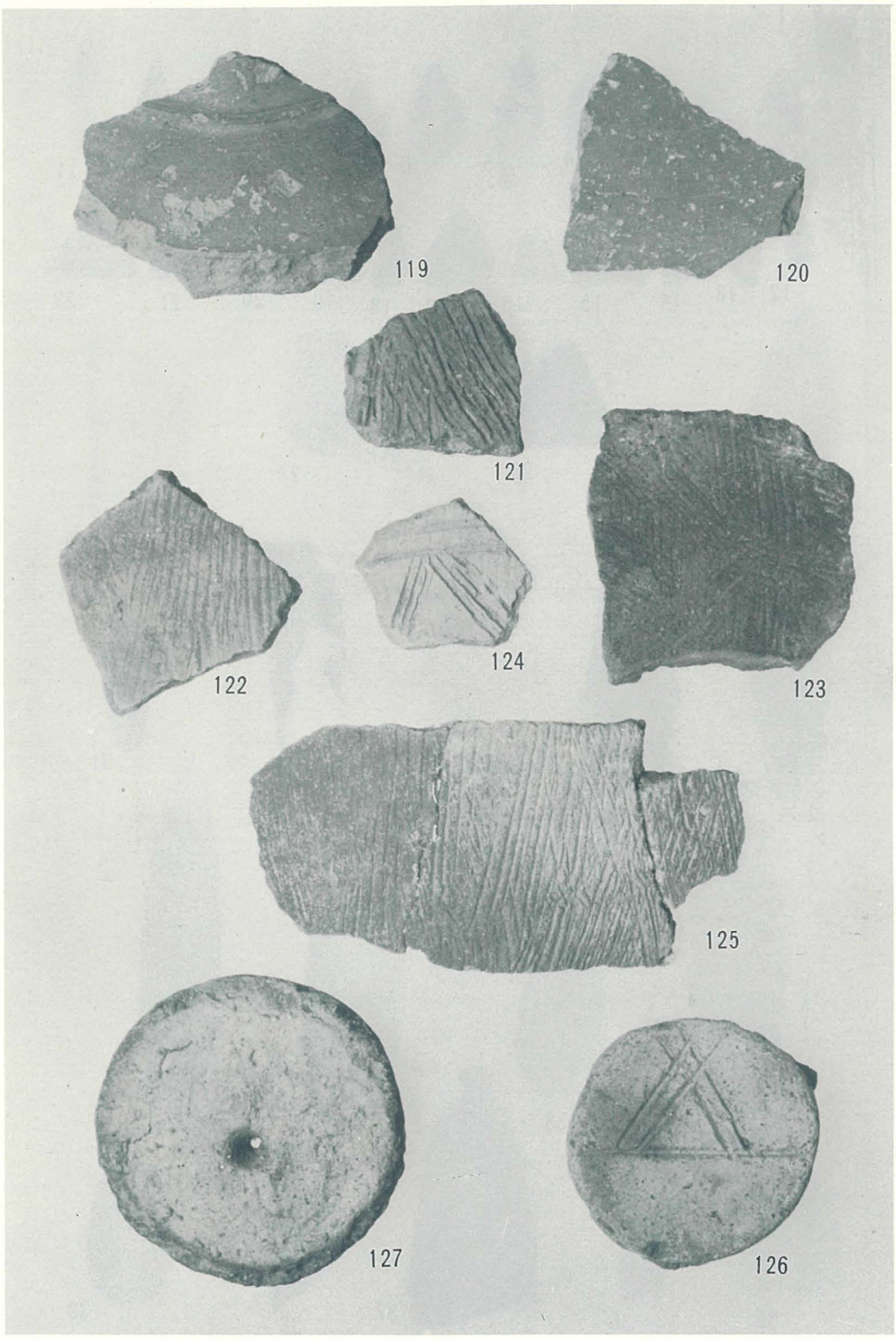
PL. 25　土器 (15)



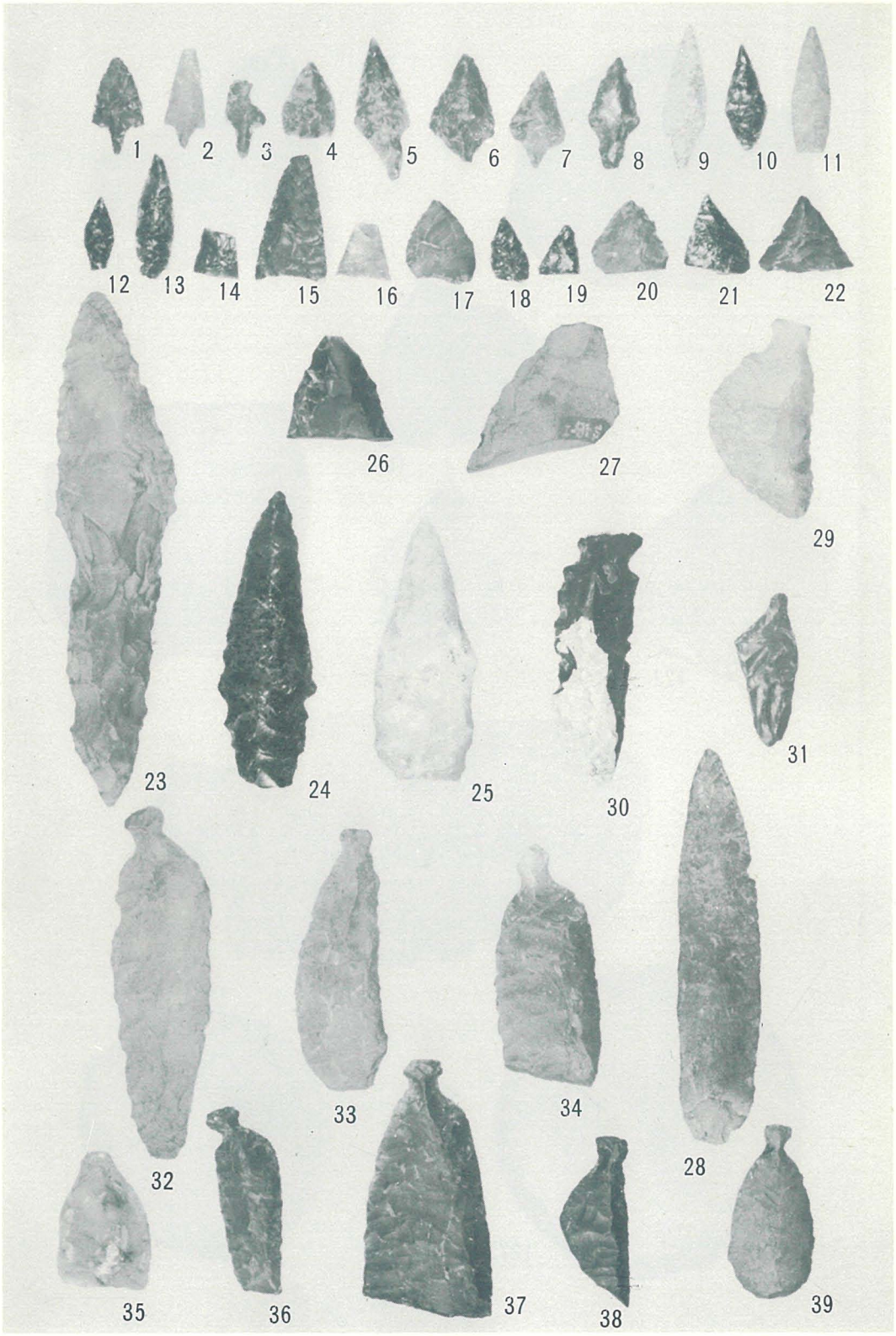
PL. 26　土器 (16)



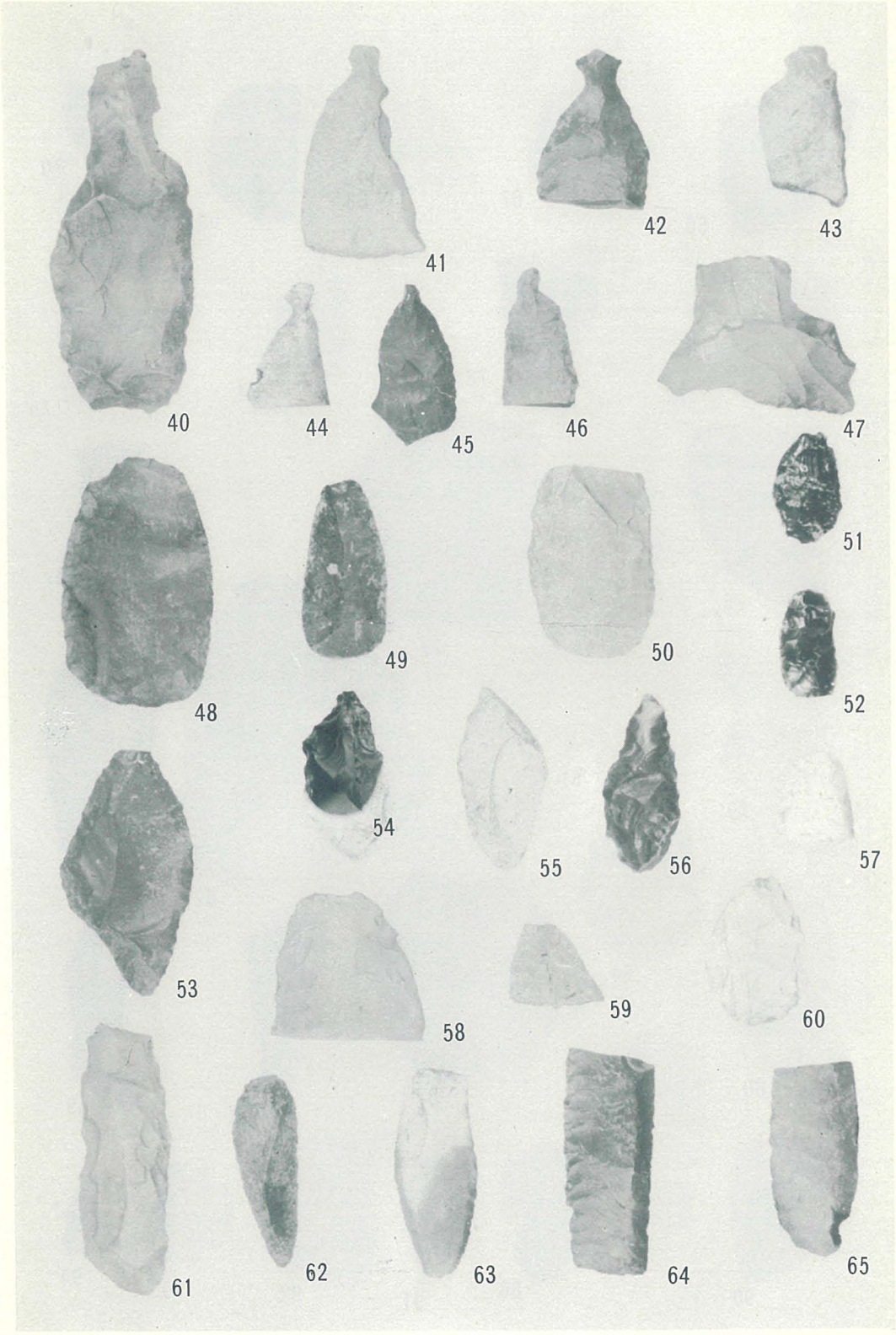
PL. 27　土器 (17)



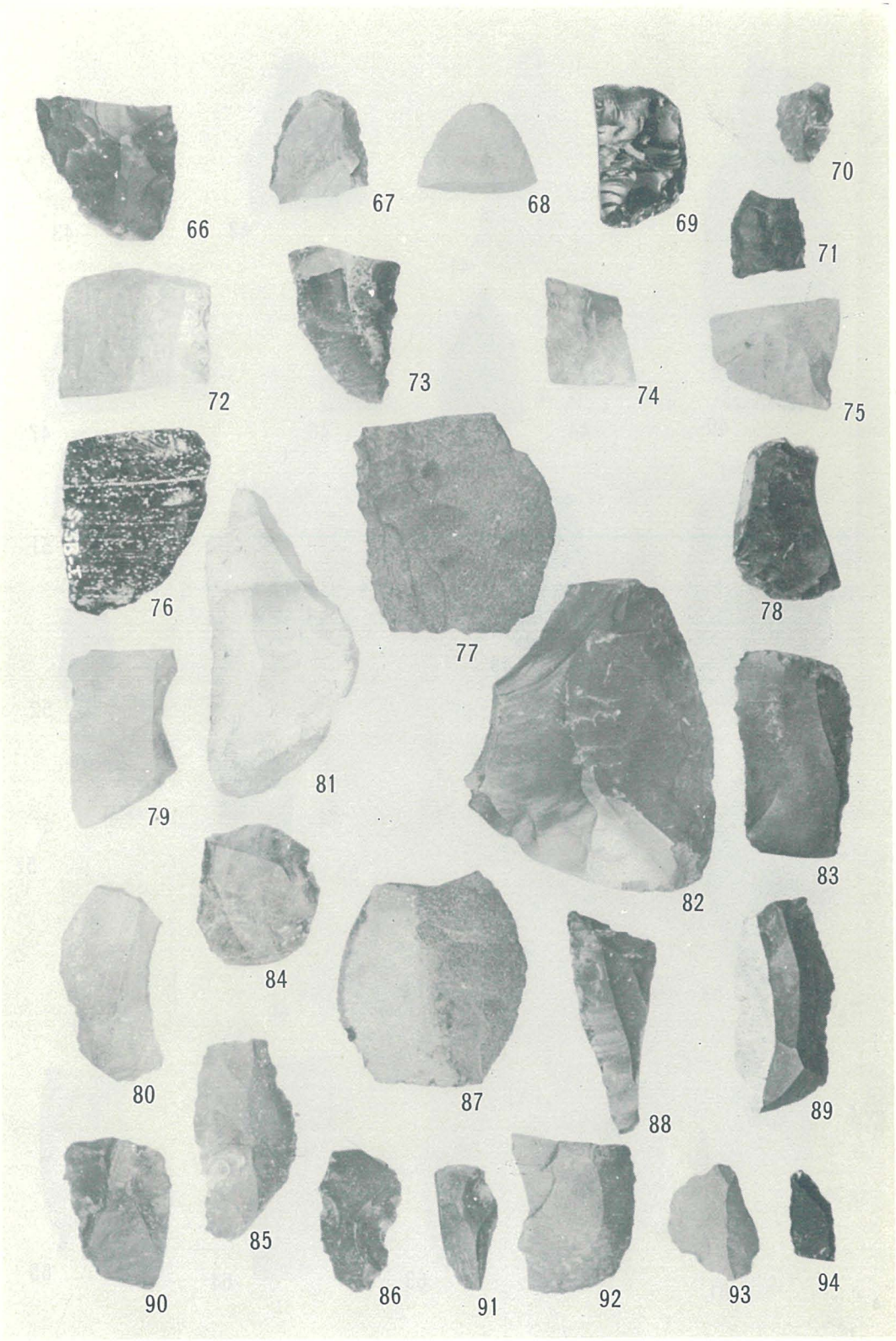
PL. 28　土器 (18)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
26
27
29
23
24
25
30
31
32
33
34
28
35
36
37
38
39

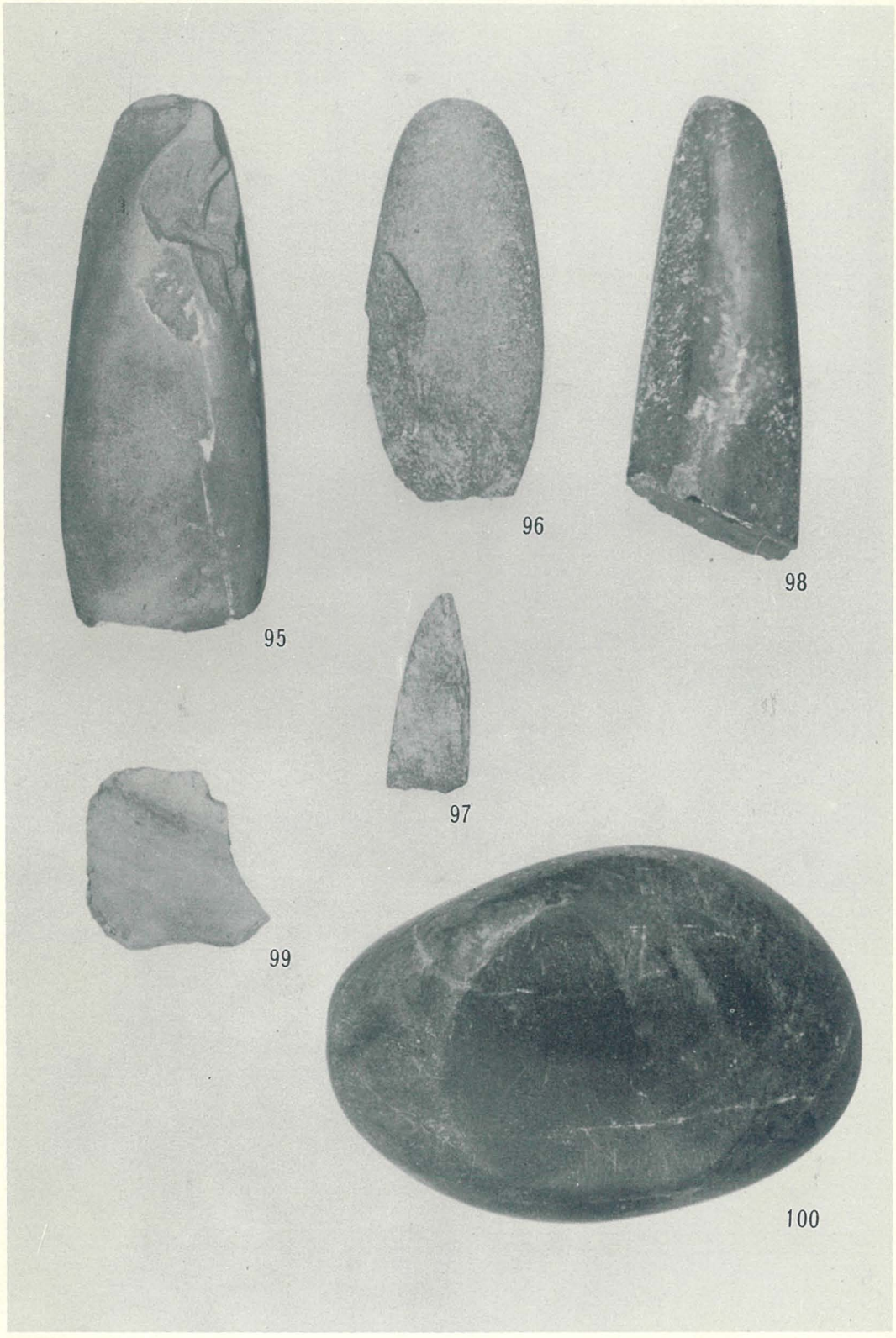
PL. 29　石器（1）


40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65

PL. 30　石器（2）


66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
81
82
83
84
80
87
88
89
90
85
86
91
92
93
94

PL. 31　石器（3）



PL. 32　石器（4）